

早稲田學報

（行發日五回一月毎） 行發日五月二 號八十六百第 年二十四治明

第十八頁の廣告に注意あれ

本號目次

▲意見▼實際の研究……………早稻田大學 自傳 文 隈 重 言

▲報告▼A……………校報……………

●大學職員年賀式……………●本部事務分掌改定……………●理工科商科囑托
●基金部報告……………●出版部近況……………●圖書館報告……………●書簡研究會發
會式

●憲法發布二十年紀念式順序豫告

B……………校友會報……………

●校友助辭……………●早稻田大學文科校友會……………●校友會幹事會……………●札
●梶校友會……………●栃木校友會……………●新潟校友會……………●愛知校友會……………
●岡山校友會……………●長野校友會……………●鹿兒島校友會……………●長崎校友會……………

▲面影▼校友宮川鐵次郎氏訪問記……………

▲研究▼初夢に就て……………

坪内博士●“Hard Times”に就て……………大山講師●エプスタ
商業史中“Coalition”と“Emerges”に就て……………平沼講師

●佛語に就て……………安藤講師

▲講演▼兩宮崩御と清國政界の現状(青柳講師)……………

▲會合▼英語會新年計畫……………早稻田音樂會……………早稻田大學基
督教青年會新年大會……………第百回雄辨會紀念大會……………

獨逸語會

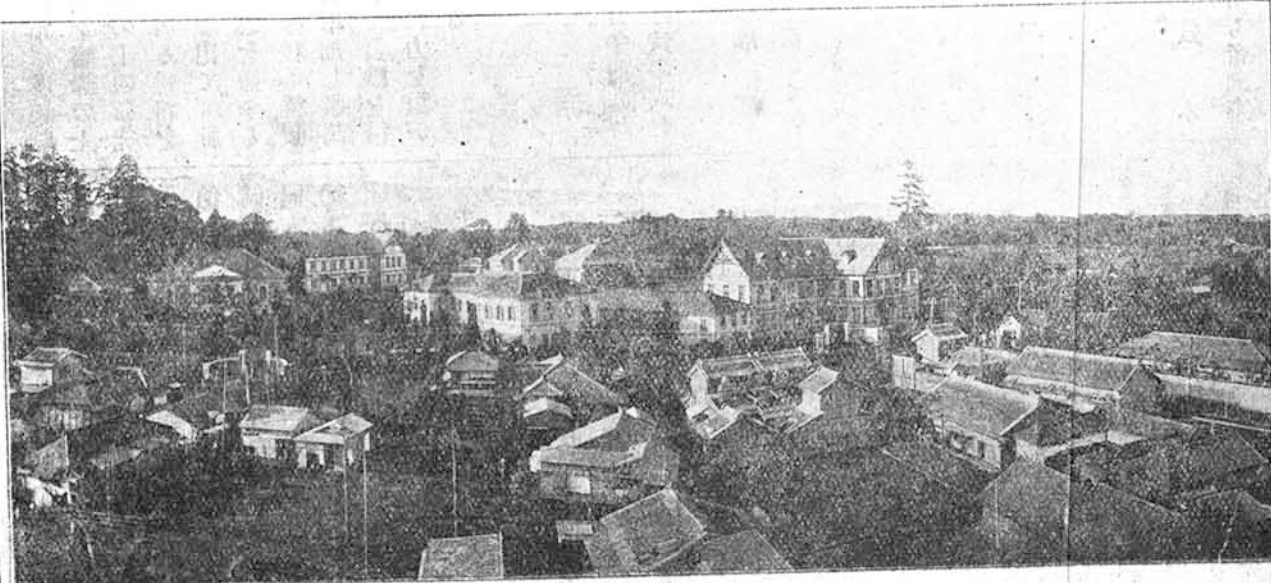
▲運動▼柔道部……………劍道部……………庭球部……………野球部……………短艇部

▲片々▼英國便り……………米國便り……………アウトトルック瞥見……………ス
ペクテーター瞥見……………アセニヤム瞥見……………高田博士宅新年謠

始……………東京毎日新聞……………世界一周會

▲新刊批評

▲二月十一日には憲法發布紀念式典あり廣告及び記事を見落すなかれ



景全學大田稻早

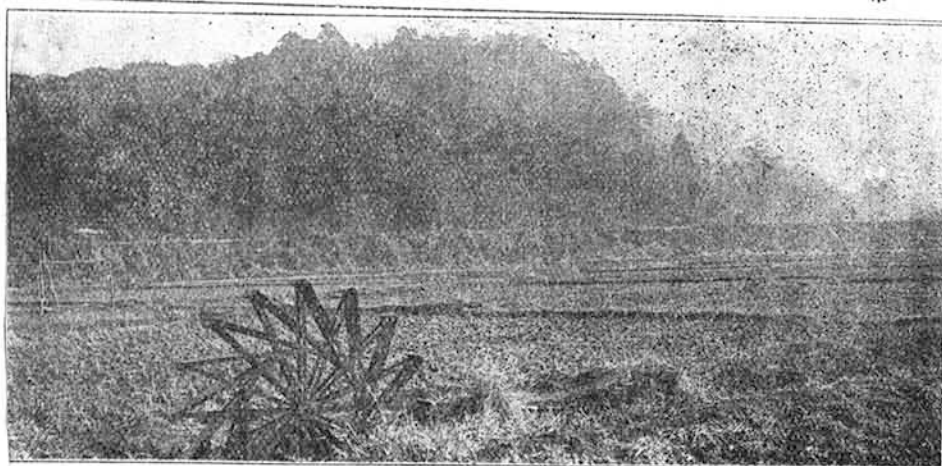
意見

實際の研究に就て

早稻田大學 伯爵大隈重信

此度大學の發展に就き、尤も吾輩の希望する所は、從來早稻田大學は學理一方に偏せず、學理を實際に應用することに常に注意を拂つて居つたのであるが、如何に意を濺いでも、未だ學校の機關及び設備が完全せぬ間は到底充分に其目的を達することが出来ぬのである。之れまで長く學窓の下に在つて螢雪の勞を積み、社會に出で、其蘊蓄せる所のものを他に應用しやうとする際に當つてどうも其の通りに往かず、爲に折角學び得た所のものは無意義に歸して仕舞ふ弊が多いとは、獨り専門學校の卒業者許りでなく、高等の教育を受けた者の口から屢々聞く嘆息の言葉である。就いては有ゆる社會に於て働いて居る所の六千の校友と學校との關係を一層親密ならしむることは之れ學理と實際とを並び進むると云ふ點に於て大に力ある譯である、今回の擴張は理工科醫科のみでなく政治、法律、經濟、商業、文學總ての擴張を企圖するのである、擴張と云ふ意味は單に授業を爲し、圖書館に於て參考書を讀むと云ふだけに止まらず、今度は總ての學

科に研究室を拵へ、文科も、政治科も、法科も、研究室を拵へる、而して所謂之を實際的に應用する上に就いて其學



日 白 の 櫻 雲

理と實際とを共に研究するのである、それには成る可く學問を實際に働いて居る者と結び付けると云ふことは餘程

必要である、されば校友は常に其經驗に依りて得たる研究の材料を實際の上から與へる、本を讀み、本の上の研究のみでなく實際に現はれて居る材料を提供する、是れ學校と學校を出て、社會に働いて居る者と常に聲息を通ずることが必要である、吾輩は學校の擴張に向つて六千の校友、漸次増加し數萬に及ぶ所の校友、社會に於て實驗を積んだ校友は此度の擴張に大に力を濺がれんことを切に望むのである。

A 校 報

●大學職員年賀式 一月一日午前九時
大學職員一同本部に參集し年賀の式を挙げたり

●本部事務分掌改定 自今本部の事務を左の三課に分ち當分課長を置かず幹事及副幹事に於て頭書の通掌理することとなり

一、總務部 幹事 田中唯一郎 會計課
副幹事 伊藤 正一、庶務課 副幹事 東儀季治

●理工科商議員囑託 今回左記の五氏に理工科商議員を囑託せり

手島 精一 坂田 貞一 竹内明太郎
田原 榮 牧野 啓吾

●憲法發布二十年紀念式 本大學にては本年の紀元節が恰も帝國憲

法發布滿廿年に相當するを機とし來二月十一日別項の順序により其紀念の式典を擧げ兼ねて學生に憲法を崇重するの氣習を涵養せしめんが爲、式後板垣伯を始め諸大家三十有餘名士を聘し各講堂を會場とし盛なる講談會を開く尙同大學にては本年を第一回とし爾後每紀元節に同様の催をなすといふ。式典順序左の如し
二月十一日零時三十分中央廣庭に於て舉行

奏樂(紀元節の歌)

- 一式辭 學長 高田 早苗
- 一憲法發布勅語捧讀
- 一訓示 總長 大隈 重信
- 一祝辭 來 賓
- 一天皇陛下萬歲三唱 奏樂(君ヶ代)

式後各講堂に於いて講演會を開く備考 右紀念祭舉行に付き學生に對し揭示しなるもの左の如し

憲法は國家の大典なり國民之れを崇重せざる可らざるは論を俟ず然れども憲法發布以來日尙淺く民間之れを崇重するの思想未だ全く普及せずと雖も、國民に對しては、實無きに非ず是れ國家の爲め憂虞すべき事に屬す惟ふに立憲思想の涵養は歲月の成果に俟たざるを得ずと雖も教育の薰陶これを補ふに於て決して効なしと謂ふ可らず本校並に見るあり偶々本年の紀元節は帝國憲法發布

滿二十年に相當するを機とし其紀念の式典を

擧げ兼ねて諸名家を聘して講筵を開き將來に於て模範的國民たるべき吾早稻田學苑の學生をして益々憲法を崇重するの氣習を涵養せしめんとす全校の學生は善く此旨を體し奮て此式典并に講筵に列せんとを望む右特に告示す

●基金部報告—其一—清國大官の基金寄附 清國法部尙書戴鴻慈氏は銀四百元、直隸州總督楊士驥氏銀參千元、清國大學堂總監督劉廷琛は金壹百圓の寄附を申込まれたり

▲其二—第一回報報告訂正

一金五百圓 秋田 横山 樹成

一金參百圓 山形 笹原定治郎

一金貳百圓宛

東京 清水銀藏●新潟 伊藤惇一●同 中野 鐵平●韓國 石塚英藏

一金壹百圓宛

東京 宮木昌常●同 小寺敏孝●同 並木覺太郎●新潟 關塚愷吉●韓國 杉田金之助●清國 梁志宸●清國 張孝核●同 岡田朝太郎●同 志田鈿太郎

一金八拾圓 東京 長沼賢海

一金五拾圓宛

東京 中沼清藏●大阪 若松精一●同 村井與之助●同 高橋鈿吾●韓國 曾根長●同 小幡虎太郎

一金參拾圓 山形 郡山 淳

一金五圓 清國 陳 紹 祖

一金參圓 福島 田中 美 稻

一金貳圓 廣島 中村徳二 山口 内田林一

一金壹圓五拾錢 岡山 藤原萬次郎

▲カーン氏の寄贈 本邦學術界の進歩を助勢せんとして毎年多額の金圓を投し幾多の碩學を渡歐せしむるを目的とする同氏は先般渡來を機とし本大學の前途を祝する趣意にて取り敢へず金貳千圓を寄贈せられたり

▲醫學博士青山胤通氏の寄附 同博士は過般清國端方氏の招きに應じ渡清され本大學の清國に於ける地位に感激し、歸來倍々本校の目的を達せしめんをを庶幾せられ清國に於て得たる報酬の半を割ひて本校に寄贈せられたり、仍て本校は支那研究及び清國留學生獎學の資金に充るの方針を以て博士の厚意を受納せり

●早稻田大學出版部近況—其一—『早稻田中學講義』の現況 中學校外教育の機關として、本大學出版部發行同講義録は、内容の完備せると講義の平易にして現代の青年獨學者に最も適當せるより、年々その講讀者を増加し、今や當に二萬有餘の讀者を有する盛況なるが、更に獨學者の研究上便宜を與へん爲め、中學講義同攻會支部を各地に設けしめ、遠からず其機關雜誌を講讀者に寄贈する計畫也。又語學研究上の必要に應じ、同編輯係にては

此程『新英語自修書』(The New English Course for self-teaching Students)と

ふ讀本を編纂し、講義と相俟つて語學上達の効果を獨習によつて實現せしむへしといふ。

▲其二—早稻田大學寫眞帖 前號の廣告に豫報しおきたる寫眞帖「わけだ」は昨夏以來之が編纂印刷に着手せるに拘らず之をし高雅無比の美術品たらしむる外に本大學の過去に於ける主要の事項を知るの料たらしめんが爲、其意匠に甚大の工夫を費せるを以て豫期に幾倍せる日子を要し今尙印刷を終ふるに至らざれども、之を四六版四倍大の精巧なるコロタイプ刷に附し總金塗最上製本となすの計畫なれば出來の上は絢爛人目を眩するの美術品たるべし。

▲其三—維新史の獻本 大日本時代史の追補第十卷として發行したる維新史は天皇陛下並に皇太子殿下に獻せんがために特に總金塗最上製本に仕立て一月廿二日大隈總長より宮内大臣を経て獻本を爲したり。

▲其四—菱湖書簡選の發行 前號に豫報しおきたる同書は去月末に發行せられたり、近時の書生が悪筆なると書簡文の認方を知らざるとに依て卒業後就職の口を得難き主として商科の學生に課せんが爲に杉山講師の選定したるものなれば習字兼書簡文の手本として必須のものたるべし。

●圖書館報告—其一—閱覽人員

貸出圖書數 昨年十二月閱覽統計左の如し

開館日數二十五日	閱覽人員	貸出圖書數
種別		
普通貸出	八、二五	二、二一三
特別貸出	一七七	一、〇八八
館外貸出	一八七	五二九
公衆貸出	三四〇	一、一三八
合計	八、八二九	二、三、九六八
一日平均	三五三、一六	九五八、七二

▲其二—開館日數の増加 本年一月より本館規則に改正を加へ左の期日の外は毎日開館して圖書の閱覽を許す事とせり、其結果従前に比し壹箇年間に於て開館日數四十八日を増加する事となりたり

歲末、年始	自十二月二十九日 至一月四日
天長節	十一月三日
紀元節	十二月十一日
圖書整理期	自八月一日 至同月二十日
學校紀念日	十月二十日

尚ほ參考の爲め其開閉時間を掲ぐれば左の如し

開館	午前八時
閉館	午後九時
但冬期十一月一日より翌年三月卅一日迄は	
開館	午前九時
閉館	午後八時
夏期七月中及大祭(天長、紀元)日曜日	
開館	午前九時
閉館	午後四時

B 校友會報告

●校友動靜 其後に於ける校友の動靜は左の如し。

岩田 督(三一法)日本商業銀行在勤
五泉 賢(三八大政)氏は牧野姓を廢して五泉
と改姓し關東都督府事務官に轉任。
船田 弘道(二八政)臺灣總督府稅關事務官に任
命せらる。

竹本 曜(二六專英)特許局審査官に任ぜら
る。
村上 萬七(三九政)日本鐵業新聞を發刊し其主
幹となる。
新井 龍(四一國漢)群馬縣立太田中學校教諭
に任ぜらる。
永野 義徹(四一大文)長野縣改島學館中學講師
となる。
田中 英信(四一英)鳥取縣濱田中學校教諭。
西村 陸奥夫(二三政)佐賀縣知事に任命せらる。
安成 貞雄(四一大文)萬朝報記者となる。
須藤 榮吉(四一大文)廣島縣私立日彰中學講師
となる。

吉川 種正(四一歷)同上講師となる。
林 三郎(四〇法制)富山縣高岡商業學校在任
福 尚 志(三八政)韓國度支部に入る。
滿留 進(三九英)近衛歩兵第四聯隊に入營。
杉田 虎獅(四〇商)札幌木材株式會社に入る。
池田 貞記(三四行政)天草新聞主筆となる。
田中 一慶(四一國漢)福岡日日新聞記者とな
る。

大前 周蔵(三九政)從來神戸海上火災保險株式
會社名古屋出張所の本店勤務に任
命せらる。

刀根 維福(三九國)氏は從來の津田姓を廢して
刀根姓となり東京二六新聞記者とな
る。
田村 八城(三六政)北海道小樽區南濱町鈴木運
送解部に入る。
田中 美稻(四〇商)大阪住友銀行本店に入る。
岸田 定五(三九政)大阪博愛房輸出部に入る。

内山 富治(三七政)上海三井物産會社支店に入
る。
長野 眞一(四一大文)三省堂編輯部に入る。
西村 弘毅(三九歷)岩手縣立一ノ関中學校教諭
となる。
姚 煥(四一專政)北京外城警廳審議課主
任兼行政處戶籍股股員となる。

校友諸君ニ稟告ス

拜啓豫テ御手許へ差出候昨年未發行校友名簿及一月發行ノ早稻田學報
紙上ニ於テ申上置候通り爾後校友名簿並ニ學報ヲ毎月六千有餘名ノ校
友諸君へ配布致候事ニ相成候ニ付テハ印刷費郵稅等多額ノ經費ヲ要シ
候間校友各位ニ於テモ會則(會則ハ校友名簿ノ初ノ頁ニ掲載有之候)
第十三條ニ規定セル本會維持費(年額金貳圓以上)ヲ洩レナク釀出被
下度奉希望候從テ未タ御納付無之向ハ此際至急御送金相成候様願上候
尙御送金ハ一月ノ學報ニ挿入致置候本會振替貯金用紙御使用被下候ハ
、好都合ニ御座候右再應得貴意候也
明治四十二年二月一日

早稻田大學校友會幹事

領野 癸三郎(四一大文)大分縣臼杵中學校教諭と
なる。
安田 爲三(三九大政)太田姓を改め宇都宮市安
田銀行に入る。

執行 傳次(四〇大政)長崎新報記者となる。
春名 成章(三九大政)山陰毎日新聞主筆となる
引土 正一(四一專政)日本人造肥料合資會社

て大阪松本組洋服店にあり。
小城 幹也(四〇商)大連市田中丸吳服店。
野崎 善雄(三九政)北海道銀行支店勤務。
川和 高德(三七法)日本火災保險會社に入る。
富村 順一(四〇大政)奉天滿鐵公所詰となる。
今井信四郎(三九政)加島銀行支店詰となる。
香田 五郎(四一商)北海道室蘭日本製網所會計
課に入る。
丹羽 幸夫(三九英)福山歩兵四十一聯隊に入る
杉山慶之丞(三〇政)二月上旬商業研究の爲め米
國へ渡航の豫定。
大瀧 讓次(四一歷)京都帝國大學文科大學助手
兼て菊花高等女學校講師となる。
浦川 數之助(三六英政)海軍中主計として軍艦晉
羽に轉任す。
藤澤 隆三(三八史)長岡中學校教諭となる。
平野 正氣(四一大文)長崎鎮西學院講師となる
徳本 賢一(四一大文)佐世保重砲兵大隊第一中
隊入營。
中野 勇(三七英政)大坂商船株式會社内航部
文書係勤務。
千葉 豐治(三八政)米國へ渡航シヤトルに在留
す。

藤田 權三郎(三八政)韓國龍山民團役所に勤務す
小竹 文次郎(同)北海道拓殖銀行在勤。
富本 茂(同)米國ウイコンシン大學在學中
増田 知吉(二八英政)金澤市明治銀行金澤支店
長となる。
遠藤 慈晴(三二英政)豐橋市明治銀行支店長と
なる。
嘉納 茂太郎(三五英政)小樽新聞社本社、札幌支
店長より轉任す。
林 行彦(三八大政)現今北海道馬匹獎勵會社
員として札幌にあり。
澤口 實三(三九大政)北海道拓殖銀行員(札幌)

高木 來喜(三六政)静岡民友新聞社に入る。
秋田 徳三(四〇大文)早稻田學報記者となる。
徳滿 早苗(三七哲英)貴州省城陸軍學堂教習と
なる。
赤松 桂(三三政)宇和島朝報社に入る。
小路 春夫(四〇法)兵庫縣屬となる。
木村 安定(四一商)大丸吳服店撰拔研究生とし

關 信正(同)札幌三井物産會社出張所員。
 堀田 憲治(三五法)札幌水力電氣株式會社社員。
 東 忠藏(三八法)福井縣足羽郡長に就任す。
 杉本喜久次郎(二五政)札幌區役所第三係長と
 なる。

赤田 盛一(三九大法)名古屋市南鍛冶屋町大喜
 多寅之助方水野銀行整理委員となる
 原田 昇(四一政)北海道拓殖銀行函館支店員
 笠井 愛一(四一商)肥前唐津岩城商會に入る。
 加藤豊太郎(同)横濱二原合名會社に入る。
 佐々木治兵衛(同)夕張炭礦汽船會社に入る。
 古岩井善太郎(同)室蘭日本製鋼所に入る。
 眞木 五郎(同)村井銀行支店に在勤す。

杉本 幸芳(三五行)横濱地方裁判所及び同檢事
 局兼横濱區裁判所及同檢事局に於い
 て事務修習を命ぜらる。

内田七郎治(四〇大法)同 東京に
 高野 精一(三九法)同 青森に
 高橋 利平(三九大法)同 浦和に
 埴見 連(三八法)同 東京に
 大内 暢三(二五專英)議會開會中京橋區木挽町
 一ノ十一岡本旅館に止宿せり。

江原 節(二三法)同上芝區高輪南町八二に寓
 居せり。
 西村丹次郎(二三政)同上神田區錦町一ノ一今城
 館に止宿せり。

佐野 春五(三〇推)同上芝區芝口三ノ三紀伊團
 屋に止宿せり。
 郷谷左治郎(二九推)同上芝區烏森一國要館に止
 宿せり。

次に左の諸氏は此度新たに東京毎日新聞社に入
 りて盛んに活動せらるる由。

●關 和知(二八政)●倉辻 明義(三一英政)
 ●橋 高廣(四〇大文)●石井 佐助(三六法)
 ●石橋 浩山(四〇大文)●波津 久清(三八大政)

●村上猶太郎(四一大政)●山田道兄(四〇大政)
 ●後藤 長榮(四一大政)●杉中 禮吉(三八政)
 ●藤田 東撰(二八專英)●石澤 愛三(三八大政)
 ●北田 朝三(四一大文)●福永 渙(四一大文)
 ●尾後家省一(四一大文)●山本憲大(三九法)
 ●高須芳二郎(三八大文)●難波理一郎(六六政)
 ●宮林 元(三九大政)●服部 嘉香(四一大文)
 ●須田辰五郎(四〇大文)
 又校友にして轉居の報ある人々は左の如し。

長田 信藏(二六文)攝津尾崎町別所村四五五
 谷 清水(三四專英)京都市上京區竹屋町堺町
 西入和久屋町へ
 田中 盛美(三九國漢)牛込區山吹町三百十一福
 田方へ

竹内 松治(三七文)赤坂區青山高樹町二十へ
 福島 琢郎(四〇商)府下荏原郡大井町字出石
 澤井 正(三九政)麴町區飯田町二ノ廿九
 引田久次郎(三九大文)本郷區元富士町二、サツ
 キ内へ

日高 呂一(三八大文)牛込區若松町八〇へ
 村上武三郎(三八國)牛込區富久町二〇
 服部 久男(四〇商)本郷區向島小梅町二五一原
 田方へ

萬所 委一(四一大政)清國北京在留の所今回天
 津滬公館に移る。
 梶本富太郎(四〇大文)駿河國駿東郡金岡村岡の
 宮光長寺中本門法花宗東照宮内
 高橋 增基(四一法)牛込區新小川町三ノ十九相
 模館へ

中村豐次郎(三七法)大坂市北區梅田町三五〇松
 谷方へ
 楠山 正雄(三九大文)牛込區矢來町四八へ
 尾崎 喜平(三六行政)牛込區神樂町二ノ十番地

小林藤次郎(三五英語科)日本橋區通達町八番地
 森川 仲治(三〇文)牛込區宮比町一五東儀季長
 方へ
 二宮 重雄(四〇歴)牛込區鶴巻町一四甲陽館
 喜田 英三(四〇商)青山區田一六四山根光次方
 大月忠太郎(三一法)四谷區荒木町廿七へ
 天野 智曜(三四政)三河國額田郡岡崎村若松

猪飼寅之助(三四法)滋賀縣滋賀郡伊香立村へ
 岡 岩吉(三六政)四谷區永住町三へ
 井口 清文(三五法)福井縣遠敷郡三宅村井口
 溜淵 政藏(四〇法)麻布區材木町四八へ
 岩味 隆次(二八法)府下豊多摩郡澁谷村下澁谷
 四四〇へ

工藤 秀宗(三一法)大坂市西區四貫島町二九七
 竹林虎之助(三八國)廣島縣福山町西町東端二
 六三へ
 渡邊 章正(三八政)神奈川縣浦賀町蛇島三九高
 橋へ

原野 高(二八法)赤坂區福吉町壹番地甲廿三へ
 山田 道兄(四〇大政)牛込區辨天町七へ

校友は其移動の通信を勉められん
 ことを望む、其通信には必らず卒業
 業年度及學科を記るされたし。

校友會會合 ▲早稻田大學文科校
 友會 は一月十六日午後六時有樂座に
 所演中の坪内博士作『初夢』の觀覽を兼
 ね同座に於いて新年會を催したり、義
 太夫數番、奇術、活動寫眞、常盤津俄

仙人、最後に當夜の呼物とされて居る
 『初夢』が演せらるの順序なり。
 此曲は實に其名の示す如く舊い夢と新しい夢と
 が交錯して表はれて居る現代のシムホルに過ぎ
 なかつた。勝頼と玉藻の前、藤姫に仙臺座頭、
 最後にロメオとジュリエット。青と緑、赤と白
 と色々な色を舞臺へ投げつけたやうな舞跳の中
 に和洋、二個の音楽はオーケストラの同じ座の
 内から洩れて出る。

休憩時間中に食堂別室で新年會を開き
 常任幹事東儀季治氏は立つて挨拶し、
 且つ次の事を協議に付した。一、八月
 の例規大會は本年より十月に改むる
 事。其理由は八月の開會は専ら地方上
 京者の爲めであるのに拘らず毎年の例
 に徴するに地方會員の上京は割合に少
 く、且つ却つて在京會員の避暑者が多
 いため來會者は少數であるといふにあ
 る。食堂を出て再び觀覽席に就けば間
 もなく『初夢』の幕は開かれた。羽子板

は倒れて、飛び出す勝頼と姫、藤姫に
 座頭、大黒と恵比壽が破れて跳り出す
 ロメオとジュリエット、天井の低い昔
 の家は夢のやうに消えて、舞臺は遠見
 の曉の色、其處へキュビットは戀の矢
 を投げれば今と昔、我と彼とは光の内
 に入り亂れて何時解くべしとも見えな
 い。充分の觀樂を盡して茲に新年宴會
 は終りを告げたは午後十時頃であつ
 た。(T、A生記)

當夜の出席者。坪内雄藏、土肥庸元、宮田修、

池田銀次郎、那部嘉香、島村瀧太郎、土屋詮教、相馬昌治、田中唯一郎、伊藤正、金子馬治、東儀季治、橋本二、秋田徳三、水谷武、細越省一、安成貞雄、片上伸、石野元藏、前田夏野、橋山正雄、大宮實三、吉田東伍外二名、白松孝次郎、揖斐四郎、田原榮、前田多藏、五十嵐力、白柳武司、中村將爲、石井政吉、遠澤昌真外十一名、小川健作、辻同次郎、永持徳一、福味文郷、渡邊守一、刀根維福、木内辰三郎外二名、村木兼太郎、水谷弓彦、平野履道、名倉間一、種村宗八、大西照、林田源太郎、曾我毅、藤井健治郎、福永漢、神戸次郎、中島茂一外二名、森脇春樹、薄田貞敬、西本波太、平渡庄兵衛の諸氏凡て七十二名。

當日會計左の如し。

一金七拾圓會費 一金拾圓坪内博士寄附 一金拾圓四拾貳錢五厘前同殘金 計九拾圓四拾貳錢五厘收入 一金六拾圓國有樂座入場料 一金四圓拾壹錢通信費 一金貳圓貳拾九錢印刷費 一金拾八圓六錢飲食費 計金八拾七圓四拾六錢支出 殘金貳圓九拾六錢五厘

▲校友會幹事會 一月十八日午後五時牛込區江戸川清風亭に於て校友會幹事會を開き市島謙吉、田中唯一郎、藤井健治郎、伊藤正、中島茂一、山本尙志、服藤利夫、山宮日辨、白松孝次郎の諸氏出席左の事項を決議せり。

一 春期例規校友大會開催の件

日時 明治四十二年一月三十日(孝明天皇祭)

午後四時

會場 麴町區富士見町富士見軒

會費 金貳圓五拾錢

一 會計報告の件

一 推選校友の件

一 校友會則改正の件

▲札幌校友會 本會は昨夏大會以來暫く會合を催さざりしが一月九日午後六時より旗亭東すしに於て新年宴會を開く、烈寒を冒して來會せられたる諸君十有五名、席定まるや小竹幹事開會の辭を述べ且諸般の報告を爲し續て酒宴に移る、地位の高下先後輩の別なく何れも往年の早稻田學生時代に返へりて談笑歡話し時の移つるを忘れ十二分の歡を盡くし九時半萬歳を三唱し和氣藹々の裡に散會せり。

當日の出席者左の如し。

中里眞清(鐵道管理局事務官) ●上島清(自家營業) ●稻川眞佐男(自家營業) ●今橋稔一(三井物産) ●長谷川藤橋(三井物産) ●澤口育三(拓殖銀行) ●高橋與一(拓殖銀行) ●杉山破覽男(商業興信所派出員) ●大瀧林之助(自家營業) ●伊藤貞次(北海道廳) ●畑田憲治(札幌水力電氣會社) ●關信止(三井物産) ●大久保直一(三井物産) ●遠藤喜四郎(北海道廳) ●小竹文次郎(拓殖銀行) ●幹事地木幾彌、遠藤喜四郎、長谷川藤橋、小竹文次郎の四氏任期満了の處滿場の承認に依り中里眞清氏指名の下に左の如く決す

▲栃木縣校友會

一月七日宇都宮市武藏樓に於て開會、本校よりは江森泰吉氏出張せられしが出席者は矢口縫太郎

(寶積赤銀行頭取)新江寅(辯護士)赤羽秀吉(下野銀行)岩松亮(農工銀行)横尾輝吉(縣會議員)太田龜三郎(河内屋旅館主)諸氏二十餘名にて歸省中の學生

十數名も是れに参加したれば意外の盛況なりき、開會前母校第二期發展計畫に關し種々協議する所あり午後六時開宴學生を代表して手塚喜三郎校友を代表して矢口氏の挨拶あり、江森氏は本校の現況基金募集の方法等に就き詳細なる報告を爲し横尾氏の發議にて矢口氏を校友會委員長に推し校友會擴張并びに基金募集の爲め各郡に委員を設くることとなし新江氏の發議にて國府津避寒中の大隈伯に祝電を送呈したるが更らに今春を期して校友大會を開く筈にて各郡委員氏名左の如し。

▲宇都宮市 江原節、新江寅、山田鶴三、松沼第三 ▲下部賀郡吉光寺秀作 ▲上部賀郡横尾輝吉 ▲安蘇郡近藤貞吉 ▲足利郡長祐之 ▲芳賀郡横松倫一 ▲澁谷郡矢口縫太郎 ▲那須郡稻澤貞一

▲新潟市校友會

同校友會は忘年會を兼ね會て母校より推選せる賛助員の面識會を明治四十一年十二月八日午後五時同市行形亭に於て開會せり、當日は飛雪續紡たりしに拘らず左記同人の出席するあり定時に至り配膳終るや幹事松井郡治氏は開會の辭を述べ且會員甚多數なるを以て幹事二名を三名に増員して改選を爲すことを提言したるに並木覺太郎氏は一同の賛成を得て幹事に小黒直一、荒川謙二、松井郡治の三氏を指名して宴に移り各自快談高話の末十二分の觀を盡して散會せるは同十一時なり

りし、賛助員中坂口仁一郎、櫻井市作の兩氏が事故の爲め缺席せられたるは遺憾なりし、出席者は 粟林貞吉 ●古閑定(以上賛助員) ●渡邊慶吉 ●林慶三郎 ●波野平四郎 ●高橋銳二 ●能勢貞哉 ●松木弘 ●渡邊寅治 ●並木覺太郎 ●小林存 ●岡田正平 ●安藤文祐 ●河合隆 ●荒川謙二 ●松井郡治

▲愛知早稻田校友會新年宴會 愛知校友會にては一月十日午後五時より西區小田原町河文に於て例會と新年宴會を兼ね開催したり。

▲早稻田岡山校友會 同會は一月五日午後五時より岡山市中山下山佐樓に於て開會豫ての宿題たる校友會岡山縣支部設置案を討議に附せしに甲論乙駁議論に花を咲かせしが結局之を可決し幹事五名を擧げて支部設置に關する準備一切を囑託して後宴に移り歡を盡して十一時頃散會せり出席者は二十餘名なりき。

▲在長野早大出身者懇親會 一月九日午後六時より在長野早大出身者及在學生懇親會を風月亭に開催幹事大脇重信氏の茶菓の饗應に始まり談笑の間に宮下友雄、岸田剛、小林辰雄三氏の希望演說並に宮澤誠氏の法理論等ありて互に胸襟を披き十二分の歡樂を盡し散會間際に次會の幹事宮下友雄氏を選任して散會せり。

▲鹿兒島早稻田校友會の議決 當地の

早稲田大學校友會は一月八日午後一時より林辯護士事務所に於て寄附募集其他に關する委員會を開き左の諸件を議決したり。

- 一、本春清正公三百年祭を期し九州校友大會を開き大隈總長浮田博士其他講師の來熊を乞ふ事
- 一、右に就き母校の同意を得る事
- 一、右九州校友會の賛成を求むる事
- 一、熊本市諸團體諸有志の賛同を求むる事
- 一、右實行に付き寄附金募集委員を以て準備委員とする事
- 一、事務所を岡村龜太郎氏方に置く事
- 一、校友會熊本支部を設置する事
- 一、募集委員(大會準備委員)中に專任委員三名を設くる事

斯くて右專任委員には水民直喜、堤政一、岡村龜太郎の三氏を選舉、直に實行に着手することとなり。

▲在滿洲長春早稲田校友會 長春に於ける早稲田校友會は運輸部渡邊氏の送別と忘年会とを兼ね昨年十二月十日午後五時より新市街千歳ホテルに開き會する者森井大槻櫻井柏原安藤柄木平井渡邊大河原の諸氏にして最初に會の方針等談議する處あり後酒宴に移り散會爲したるは午後十時なり。

一月三十日の校友大會は近來の盛會にして大隈總長の趣味深き演説は悉く校友に速報せんと欲するも紙面餘地なき爲全記事を擧て之を次號に譲ることせり。



龍然たる Historian's History 二
十五卷に對する英國三大名士の評
東の如何に短簡なるよ
ロバート元帥は

The book is a very valuable one, and cannot fail to be of the greatest use to me.

と云ひカーゾン卿は
Your Universal History appears to be a very useful as well as a scientific publication. I do not know whether more to admire it for the range or its condensation.

と云ひクローマー卿は
A most valuable addition to my library.
と云ふだけである



面影

東京市助役 宮川鏡次郎氏



神樂坂を上つて矢來の交番まで來る少し手前の左側に一寸人の眼を曳く淡黄塗の西洋館がある、嚴めしい花崗石の門柱には宮川鏡次郎と陶器の札が掲げて

ある、此所だと思ふ、戸口に立つてベルを押すとやがて取次があつて二階の應接室へ導かれた、應接室は洋風の裝飾で、四周の窓からは引絞られた蝦老色のカーテンの間に半込小石川邊の人家の屋根が波の様に光つて見える、庭木の梢も見える、丁度晩冬の空が快よい色に澄み切つて居る、眼を室内に轉すると先づ四壁には大小幾つかの額がある、見覚えのある川村清雄氏の油繪で風景もあれは動物もある中央のテーブルには早稲田文學其他の新聞雜誌が載つて居る銅製の草刈女も立つて居る、薦められたまゝ白布で覆はれた椅子によつて窓を横切る日光をながめながら暫く待つと、重い足音が下から湧き上つてやがて短髪で飛白を着た人が入つて來られた、寫眞で見知つた氏である。

初對面の挨拶がすむと、大きな丸い陶製の火鉢の中に擁して穩やかな重みのある口調で、記者の來意に對して語られる。

「實は學報にも何か書いてあげたいと思つて居るのですけれども、筆をとる暇にある間は自分の方のを書かればならず、筆を捨てると書くのが面倒になつて……ハア雄辯會ですか、先日から頼

まれてゐるのですが風邪で具合が悪いものですから二三回失禮してゐます、が今度の金曜には出るつもりです、而し私は喋るのは至つて不得手で、其上大きな聲を出すのが苦しいものですから……それに私は小兒の時から吃る癖がありまして、どうかすると平常の話でも突と行止る事があるので、それでも度を重ねて勉めてやつて居る間にかう云ふ事を考へついたので、どうも行止るのは母音の言葉の先に來た時だから演説の時などには母音の頭にある詞、例へば挨拶と云ふのが來た時には其先へ子音を附して御挨拶とする様に心したのですが、得る所があつて今では大に樂になりましたが、それでも折々支へる事がありますよ、そうです演説には態度が大切ですから手を動かして居ると聲もそれにつれて自然に出來るものです……。

雄辯會ですか、雄辯會では自分が牛込區長と三年してをつた間に感じた事を話そうと思つて居ますが、中には利益になる事もありましたよ。

聽衆の意向などに對して如何な態度を取つたらよいかと云ふ様な事に就ても別に變つた事はない様です、もとゝ何か話すとすると自分の頭を土臺としてかゝるので眼の勞や口の勞はそれ程重くない、眼のつけ所などは最初に一點を略定めて置くのです、而し折々はかう云ふ風にして變へますが、何にしても頭が第一です、頭を確かにして、居いて聽衆を呑込むでかゝる事が大切で、そこへ行くと學校の先生などは都合がよいのです、常に生徒に向つて居ますから。

「昨年の冬は青柳篤恒さんの支那に關する面白い演説がありました」

「そうです、青柳君は中々演説がうまいから……二時間もありませんが、長い演説になると上手でなければ出來ませぬ、又音量がなければだめです、先日亡くなつた圓城寺君などは體が大きく

つて聲も大きかつたですが上手でした、高田博士の怒々として追まつておまへせん、聲が高くなつても自然にかう高まつて行くから開心地がよろしい、手を矢鱈に振り廻し案を打つて青筋を立て、やるのは浅い様です、それから言語を落附いて明瞭にする必要があります、そこへ行くと講談師などはうまいものです、私は好ですからよく講談を聞きに行きますが貞水などは上手です、落語家でも圓喬などはうまいでしよう、眼を閉じて聞いて居るとある場合などは圓喬一人で啼つて居るのが三人も四人も話して居る様に聞える、一人が何か云つて居る側に「ハッ」とか「そうですか」との云ふ語を挿むとそれ／＼音の違ふものだから今のは甲か乙かと云ふ事が明かに分ると同時に事件の進行を逐ふにまどはぬ、私がよく云ふ事だか小學校の先生などは少くもかう云ふ技量が必要である、「すると太郎さんが云ひますには、すると次郎さんが答へますには」といくつも並べて行くなどはまづい仕方ではないです、幼稚な頭に事件を明白に入れるには音の變化を使ふ、などは尤もよい手段でしよう。

「役者がせりふを使ふ様な風になつたらどうでしよう。」
「そう極端に行つてもどうかと思ひますが、少しは言葉の調をつけるのはいいでしよう、坪内博士の講義がさうです、全くせりふではないけれども其心持が現れておますからよく分るでしよう、さう／＼、さう云ふ事もありましたな、小さんが小學校で話方をしてみせたと云ふ、小さんなどもうまいものです、第一落附いておます、落語家でもつまらん駄洒落などを云ふのはいけないのですが、眞面目なのは聞いても利益になりません私はよく區長をしてた時分に小學校の先生を引張つて聞きに行つた事がありました。

演説をする時に面白い時には笑ふ、悲しい時には泣くと云つた様に言語に應じて感情を動かして行くなども全然ないとは云へませんが、どうもそう無暗に泣いたり笑つたりしては演説が崩れてしまひます、それかと云つて悲い事を云ふ時には少し俯目になると面白く事を云ふ時には少し反身になると云ふ身振はいくらも必要でしよう、そこからは座談と演説の大に違ふ所です、滑稽な事を云つても眞面目で居るから可笑しいのです。」
記者は話の切れ目に急かしてしうからと立上ると、
「さうですか、夜分ならいつでも居りますから来て下さい。」

研究

「初夢」に就いて

坪内博士

「初夢」の上場に関しては別段言ふほどの事も無い。有樂座の出し物として一月物には適當だらうと言ふところから出すことを許したといふまで。僕の作としては最も甘口な物で、これが場によつたからとて、さしあたり將來の發展に如何といふ影響もありさうもない。併し新代の若い人達で餘り在來の振事物、就中大切淨瑠璃といふものを見馴れてゐない人達に取つては何等かの参考になつたかも知れない。現に僕のところへ書面を寄せて舞臺に上つたのを見てはしめて作意を味ひ得たと云ふ意味の事を言つてよこしたのも一二ある。其實舞臺に上つた味ひと作の味とは矛盾してゐる點もあるのだが藝者共の踊の外を餘り多く味はつてゐない人々に取つては讀んだばかりでは舞臺面の想像が附かぬのも無理では無い。

僕の所謂舞臺劇は大ブアンビシヤスなもので、「浦島」や「かぐや姫」をホンの見本と名づけたのは謙遜でもなく、俗おどかしでも無く、正直正路の話である、隨つて「本かつぎ姫」とか「俄仙人」だとか「金毛狐」だとかいふ間の概として作つたものは僕の理想でも何でも無い。況や今度の「初夢」の如きは、間の概中の更に概なるものだ。元、間の概といふのは、一段高尙なものを實演せしむるまでのホンのツナギの作といふ意味。譬へば高い所へ登るには梯子が要る、其梯子の一段々々に當るやうな作を假に間の概と名づけるのである。今の日本の俗曲家などといふものは、十九世紀の文藝思潮とは全く以て風馬牛で没交渉である、まして廿世紀の今日日本演藝が如何成りゆくか、如何成りゆかせねばならぬかなどといふ事を夢にも考へてゐやう筈が無い。彼等の眼中に在る人間は藝妓か俳優か祝儀をくれる旦那か弟子筋か所謂蟲負の組織分子となる世間の男女で、其他には何もない。少々誇張して言ふと彼等と談話をするには折々には通辯が必要な位。作曲などに關して注文を出すに於ては、用語に困る。君等と語る時のやうに文藝上の科語や抽象語を用ひては彼等に通じやうが無いだらう。そこで僕などは腰々比喩を用ひ、又は彼等が用ひるやうな語を知つてただけは利用して注文を試る。ところが比喩といふやつは解り早いと言ふ、長所のある代り、主觀的のトナテモナク解釋を容れ得るから間違ひ易く、又先方の通語を用ひると、先方の舊い聯想が邪入をしてこいつも時としては間違ひの種だ。始末にゆかぬものさね。右の次第ゆゑ初手から七むつかしい作を試みさせる事は到底無駄。間の概からはじめて心長く彼等を導かねばならないと思ひはじめて。氣の早い手合は到底彼等は役に立たんやうに思ふ。又事情を知らぬ手合は到底俗曲者流中から作曲者を出すことは難いやうに思ふ。僕は必ずしも名人があるといふでもなし、又どういふ作曲の天才があるといふでもない。それに比べればまだ

しも俗曲者流中に多少取り所のある音楽者があるまいものでもない。作曲の才が必しも彼等に無いとは限らぬ、只不足なのは腦の作用だ。出来るか出来ぬか彼等を導いて、新思潮に没頭されることか急務だ。讀んで字の如く、新しい思想感情の潮の只中へ首つたけは、まらせて見たら如何かといふのが問題だ。無論これは出来ない相談に近い、しかしやつて見ないで棄てるのは僕の流義でない。ともかくこゝ、少くとも十年は試みて見やうと思ふ。

此心にもとづいて已に三四の作に作曲を試みさせたのである、何れも十分で無いことは勿論だ、併し一寸二寸でも在來のコン、エン、シン、ヨ、ン以外に出ることが出来れば先づそれだけが進むのだと言つてよい道理だ。「初夢」の如きも其一つと見做すことは出来る。

「初夢」には古い詞句を借り用ひた部分も少くない。併し一篇を貫く趣味と作意とは在來の物と殆ど味ひを殊にしてゐると言つてよいと思ふ。これは説明することは管々して出来ぬが、古いのと讀み比べて見てくれれば忽ち解ることだ。有樂座の興行は種々の缺點があつて、作意の半を殺してゐると評すべきである。先舞臺が狭いため、に歌舞伎座を標準に書いた作意と折合はない。次に道具が如何にもお粗末で、舞臺のメリ出しや花道のスツポンを使はんから人形が皆同じ所から而も甚だ不細工の観音屏から出るといふ不躰裁。それで西洋樂があつての通りのヤツテツケで、殆ど眞面目の打合をしないで初日を出すと言ふ段取だからお話にならない。それから役者が衣裳を附けて道具立をして舞臺で稽古などは只の一度もしない。まるで三四日頃までは下稽古も同然。之は日本演藝界の目下の通弊といひながら、これで錢を取るとは不埒ではあるまいか。あの子役の風なぞを見たまへ。不活潑なことまるや豚のハラ、子でも

あるかと思ふ。僕の作意は玉乗の子供を使ふやうに書いてある。と言つたやうな譯ですべてが作意とは調和せぬやうにもなる。僕の思ふ通りにさせれば「初夢」のやうな甘いもので、マサカあんなぢやあないよ。ほんとなよ君。今に見たまへ君たちに怖いスバラしいものを見せるよ。澤山は要らん十萬圓位で出来るよ、どうだ君出さないか。

因に右の一文は博士が記者との談話に擬して書き與へられたるもので博士平素の抱負と主張を紹介し得る事と思ふ。

●“Hard Times”に就いて

大山 講師

經濟學上の意義に於ける“Hard times”とは、恐慌(Crisis)のために、物價俄かに低落し、市場混亂し、銀行會社個人の倒産相次ぎ、産業社會の一般に打撃を受けたる餘響尙ほ收らず、市場萎靡して製造家は生産を手扣へ、若くは停止し、労働者は全く失業するも、然らざる者も其職業の大部分を失ひて、生計の途に窮し、斯くて苦痛が經濟界一般に滲る期間を謂ふ。此期間も案外久しく繼續する原因に就いては、Walker, “Political Economy”, pp.178—185 に詳細なる説明あり。

參照——“In a more special sense a financial crisis is the confusion and loss that mark the end of a period of rising prices; an industrial depression is the period of hard times that follows.....A long period of hard times is sometimes called a crisis, but it is better to distinguish it by the term industrial depression.”

Fetter, “The Principles of Economics” p.346.

恐慌の理論に就いては、殆ど如何なる經濟學の著書にも其説明を見ゆべしと雖も、Walker, “Political Economy”, pp. 174—177; Seligman, “Principles of Economics”, pp. 487—490 の説

明は要を得たり。單行本としては E. D. Jones, “Economic Crisis”; F. E. Burton, “Financial Crisis” あり。又吾人の記憶に新なる一昨年の米國の恐慌に就いては、“The Economic Journal” (September, 1908) の中に “The American Crisis of 1907” by Prof. O. M. W. Spargue なる一文あり。該誌は本大學圖書館内にあり。

●エプス 商業史 第七頁 (Coalition)

平沼 講師

Coalition は、聯合又は同盟と譯す。從來、利害を一にせず、又は、抱負を同じくせざる黨派若しくは邦國が、或る共通の目的を達せむが爲に、相合同し、動作を共にするを謂ふ。内政に就きて言ふときは、特殊の目的を達せむが爲に、一時、黨派の聯合を形成する者にして、例へば、一八八六年(明治十九年)、英國國會に於いて、愛爾蘭自治案の提出以來、保守黨と改進黨との聯合を見たるが如き是れなり。一七五七年(寶曆七年)に於けるピット(Pitt)とニヒツ、カヌブル公(Duke of Newcastle)との聯合及一七八二年(天明二年)に於けるフォックス(Fox)及ノース(North)の聯合の如きも、亦然り。外交に就きて言ふときは、國と國とが、或る共通の目的の爲に同盟を爲し、以て共同の動作を爲すの謂なり。本文に言へるは、此の第二の意なりと知るべし。

●同書 同頁 (Emigrés)

同

佛國大革命に際し、本國を退去せし王政黨は、即ち(Emigrés)なり。第一回の退去は、一七八九年(寛政元年)、バスチーユ(Bastille)陥落後に在り。當時、路易第十六世の弟、アルトア伯(Comte d'Artois)及前大藏輔カローヌ(Calonne)其黨を率ゐて、國土を退去し、英、獨、伊の三國に流寓せ

り。爾後、革命の進行するに従ひて、其の數を増加し、歐洲諸國の元首に、佛國の侵襲を懲らして、遂に一七二九年(寛政四年)の戦争を開くの端を爲しき。退去者は、佛國侵襲軍に加りて、盡す所ありしが、一七九三年の戦敗以後は、勢力挫折して、復、活動の見る可き者なりき。(E. Daudet's Histoire de l'Emigration 及 A. Lebon's L'Angleterre et l'Emigration Française de 1794 a 1801 參照)。

●佛語に就いて

安藤 講師

冠詞の用方
唯一の名詞を形容する二個の形容詞の前には冠詞一個を置くのみなり即

Le pauvre et malheureux Irlandais se dépense chaque jour.

憐にして且つ不幸なるアイルランドは日々に入口を減す。

然れども二個の形容詞が各個別々の意義なる名詞に係る時は冠詞を繰返して各形容詞の前に置く

On ne doit pas juger du bien ou du mauvais naturel d'une personne par les traits de son visage.

人の容貌によりて其人の性質の善惡を判断すべからず。

又此場合に冠詞並に名詞を複稱となして左の如く云ふ可なり。

J'ai lu aujourd'hui les troisième et quatrième chapitres.

私は今日第三第四章を讀みました。(以下連載次號)

講演

兩宮崩御と清國政界の現状(接前)
講師 青柳篤恒

是に至り氏は清國々家の發育の健全なるを立證せんと試みて曰く

先づ卑近な例を申上げると斯の如き譯で、國家の進歩と云ふものは著しい、社會の發達亦著しいこと、誠に喜ばしい結構なことである、早く日本に歸つて、この新支那の新しき現象を親密なる諸君の前に紹介したいものであると斯様に樂みにして待つて居つた私は、今回の皇室の御不幸、今回の事變が起るに及んでより以上に愈々確實に清國の國家としての發達を認めたいのであります、圖らずも今回の事變が清國が國家として立派に發育しつゝある跡を吾々に語つて居ることを今回諸君の前にはから多大の趣味を以て紹介せんとするものである。

十一月三日即ち天長節は清國の十月十日即ち皇太后、前の太皇太后陛下の萬壽節に相當した、此時錫島侯爵の一行は既に北京に到着せられ、萬壽節で宮中は非常に御忙しく、萬壽節の前後約十日間と云ふものは宮中音樂の聲を聞くのみであると云ふやうな有様であるから、連も兩宮陛下に謁見することは適はないと云ふので日本の十一月八日に謁見をせらるゝことに極つて居つたのであります、所が其前日になりまして清國の外務部から日本の公使館に特使が參つて、西太后が御不例であらせられる、謁見は連も明日は適はない、どうか錫島侯爵にそう四五日北京に滞在して十一日に謁見せらるゝやうにしたいものである、と斯う云ふ通知であつた、其時の模様を尋ねましたのに依ると別段に

さしたる御事が御ありになると云ふ譯ではなくして、萬壽節の前後御忙しく、御無理に御無理を重ねられた所から少しく御不例の體である、之に加ふるに下痢症を起されたと云位の話であつて、それで鍋島侯の一行は然らばと云ふので漢口へ出發されるのを十二日に延されまして、十一日の謁見を非常に楽しみにして御待受であつた、所が其前日十日になりまして外務部から公使館に使が来た、今度の使に依ると以前の西太后の御病氣とは丸で話が違つて、皇帝の御病氣と云ふ振れ込みである、皇帝が御不例にあらざれる、明日の謁見は逆も適ばぬ、と云つて、三四日御待ちになつた所で逆も謁見を許されぬ見込がない、斯う云ふやうな話であつた、兩宮陛下の御不例不豫と云ふことは決して今に始つたことではないので、諸君も始終内地の新聞に出ます北京電報で時々兩宮陛下の御病氣と云ふことが傳へられてあつたのを御覽になつたであらう、大して珍しいことでもないのであるから勿論さしたる御事があるとも考へず、鍋島侯爵は遺憾ながら謁見することが出来ずして、其翌日十二日の朝早く北京を立たれて漢口に向はれたのであります、所が翌十三日のことである、私の最も親密に致して居ります或る清國の人から電話で色々の警報が傳つて来る、西太后陛下の發熱は愈々甚しく、何も召上ることは出来ずして唯頻りに西瓜の汁を飲んで居らるる、或は皇帝は御危篤である、皇位繼承問題に就いて今丁度宮中で王公大臣大會議の最中である、慶親王殿下は東陵より今朝未明に急を聞いて馳せ歸られたとか、又は醇親王の子溥儀殿下は既に宮中に擁せられたとか、又攝政は慶親王と云ふ噂があつたけれども今日となつては醇親王の呼聲が高いと云ふやうな色々の風説が二三の或る清國人から電話で知らして呉れた、皇帝の御

危篤と云ふこと、是も餘り耳新しいことではない、幾度も吾々に傳へられたことで、何時でも幸にそれが事實にならなかつたと云ふ丈けのこと吾々は皇帝の御危篤と云ふことを耳にして密に不安を抱いたことがありました例が幾度もあつたのである、故に今度のことも前に馴れて居りますから左程に心配は致さない、すると十三日に丁度學部の左侍郎をして居られます嚴修と云ふ方が居られる、此方が丁度十三日の晩に自宅に私の歡迎會を開いて呉れることになつて居つた、所が夕刻になりまして學部から早馬の使が參つた、見ると嚴修氏が自分で認めた書面を持つて来て居る、聊か不安の念に打たれて居る私は妙な心持がして、其手紙を取る手遅しと開いて見ると、今日は折角御約束をして置きましたが學部に據らない差支が出来たから今日の宴會は暫く見合せることにする、孰れ二三日中に私の方から御訪問を致したい、斯う云ふ文句が一寸終りに書いてあるので餘程餘裕があるやうに私は認めた、二三日中に御尋ねるとある以上は別段皇帝の御不豫に關係した重大な問題でないかも知らん、と云ふ風に解釋して居りました、所が丁度其翌日十四日の晩に張之洞氏の本で申せば秘書官を勤めて居られます王孝繩と云ふ方から招待を受けて居つた處が、十三日の晩、今の嚴修氏の使が歸つて間もなく王孝繩氏の使が參りまして、據らなき差支が出来て逆も自分の宅に歸つて来る事が出来ぬから明日の晩の招待會は見合はせる、是で二度である、こゝで大に不安の念を抱いたのであります、明れば十四日、諸君の御承知の醇親王を攝政王となし其子溥儀を宮中に教養すると云ふ上諭が前夜即ち十三日の晩發表せられたのが十四日の朝になつて吾々の手に遺入つて来た、こゝで愈々清國の皇室の御不幸は遂に確に通知を受つたか

の如く吾々同人一同は一種異様の感に打たれたのであります、明十五日の朝早く或る方面から電話で、光緒皇帝は前晚即ち十四日晩六時半に崩御せられたと云ふ知らせがあつた、程なく醇親王の子溥儀を立てて皇帝となすと云ふ發表があつた、夜になりまして同じ方面から電話が掛りまして、西太后陛下は今日即ち十五日の午後二時四十五分に崩御せられた、五時に御遺骸を内殿に遷し奉つたから知らせると云ふ電話、而して其翌十六日に西太后崩御の發表があつたのであります、

此二三日の間の北京はどうであつたかと申しますと、全く穩かであつたと申上げないがさうではなかつた、人心恟々として居つた、兩宮陛下の崩御、是から以後のこと、前途のこと等に就いて誰の口からも言ふともなく、世間は何となしく騒がしかつたのである、そこで氣の早い支那人の中には逸早く第二の義和團などを募りて盛に支那銀行に取付けに往く、即ち避難の用意をするものがあつた、銀行が幾つも倒れたと云ふのは其當時の話である、私なども少し許り支那の紙幣を持つて居つて一時面喰つた、とがある、何處へ持つて往つても支拂停止で取換へて呉れない、是は反古になるかも知らん、有るか無しかと云ふ程の少し許りの金の中からは丈だけ減つては大變だと思つて大に經濟界の恐慌を起した(笑聲起る)ことが其當時あつた、又支那の人許りではありませぬ、外國人の中にも某國の人の如きは兩宮陛下一時に崩御になつた、是は容易ならぬとであると云ふので、万々一の事のあつた時には誰々の家を中心として其處に皆集まらうではないか、斯う散り／＼バラ／＼になつて居つては万々一の事があつた時甚だ危険だ、素破と云へば誰の宅を中心として其處に集る、こゝに約束を極めやうではないか、自分の家から

其人の家に往く道は此順路を取る、途中で遭つた時には自分の國の言葉話さないで合言葉を話す、其合言葉は斯うだ、と云ふことまで打合した人すらあつたのであります、其位にまで北京も一時恐慌を起して居つた、是が十三日から十六日の晩に掛けての有様である、殊に十六日の晩は最も警戒恐慌を極めた晩であつたが、夜が明けて見ると實に意外だ、平和の日月は今日も昨日の如く同じやうに支那の大陸に温かい光りを浴せつゝある、ガタリとも言はない、平生の如く平穩無事、何事もないう色々仕度をしたりました人は少し拍子抜けでガヤ／＼と云ふ譯で手持無沙汰の感があつたのは事實であります、何しろ清國のことであるから例へ兩宮陛下が御他界遊ばせられた所で端から公々然と喪を發すると云ふことは逆もあるまい、例へ崩御せられたのが事實なりとしても一月か二月後でなければ喪を發することはあるまいと考へて居つたのに、何の秘する所なく、何の腹藏する所なく、何の遠慮する所なく、折重つて喪の發表をし、丁度あの當時南、揚子江の近き安徽省の桐城附近に於て陸軍大演習を行ふ時機であつた、是などは必ず中止にならうと我も人も信じて居つた、所が聞いて見るとイヤやると云ふ、成程宴會はやらない、觀兵式もやらない、けれども演習だけはやる、豫定の如く實行する、斯う云ふやうな話であるから愈々奇體に感じ、ナント氣味の悪い平和ではないか、此平和は全體如何にして得たのであるかと云ふことは中外の人を擧げて皆一種不可思議の念を抱いて解釋することに苦んで居つたのであります、其解釋を聊か是から私に諸君と共に茲に研究をして見ると、非常に光榮とするのであります、此點は今日諸君の前に御話をして、音に諸君に御理解を願ふのみならず、諸君の御力を借りて一人でも多くの

に、一人でも多く中外の人に新支那の現状を紹介して頂きたいと思ふ、此處は今日の演説の要領骨髄でありますから項目丈を私は茲に列記する積りであります。

と述べ第二「宮中の平和と公明」第二「王公大臣の一致」第三「國民平和を思ふの念」第四「中央の武力」の四要點を黑板に列記し順次其熱心なる談路を進めたり曰く

第一に宮中の平和と公明と云ふことを説明致さうと思ふ、凡そ日本人と歐米の人とを問はず世間の所謂東洋通、支那通と稱せらるる人の中には支那の未來のこと、清國の前途に就いて少なくも二つの豫言があつたやうに私は記憶致します、其一つは畏れ多いことであるが西太后陛下萬歳萬々歳の後、病氣重らせられて愈々御危篤と云ふ時は光緒皇帝の御壽命に對し奉つて最も危険なる、最も戒心すべき時機であると云ふのが第一の豫言である、即ち之を説明すれば皇太后陛下が病重らせられて御大事と云ふ其利那は、豫てより西太后の歡心を得んが爲に直接或は間接に光緒皇帝に對し奉つて迫害を加へつゝあつたる王公大臣等は、西太后一度崩せらるるや光緒皇帝御親政の御世となつて禍忽ち自分の身に及ぶと云ふことを恐れて、最も恐るべき、最も驚くべき陰謀に出ではせぬかと云ふのが一部は東洋通の豫言であつたのであります、清國が外國人の思ふて居つた如く隠秘なものであるならば、一種不可思議の伏魔殿の隠秘なものであるならば、斯くの如きことが必ずしも有り得ないとは言へない、日本とは違つて清國は一碗の茶以て人を活殺するのである、油断はならない、此豫言が必ずしも當らぬと云ふことは言へなかつたのである、然るに今度の清國皇室の御不幸、

兩宮崩御の跡を諸君御覧になると、外から見た形式の上から申すと此豫言が誠に適中して居るやうである、何しろ御二方日を隔つる僅に一日にして崩御になつたと云ふことは此豫言が少なくも形式に於て適中して居るやうである、そこで色々の風説が持上つた、流言百出、一は兩宮陛下の中、何方か御一人は唯崩御になつたのであるまい、毒害でもせられたのであるまい、皇帝の喪は先に發せられたけれども若しや西太后が先に崩御されたのでありはしないかななどと云ふ色々の推測が現れて來た。

東洋通の所謂第二の豫言はどう云ふことであつたかと思ふ、第一の豫言の如くに兩宮陛下が一時に崩御になると、所謂支那の中心を失ふ、支那的の文句を並べれば天柱摧地維缺と云ふ有様、中心が緩んで來る、そこで支那の帝國は支離滅裂瓦解して支那の大亂となるであらう、是が第二の豫言であつたと記憶致して居る。

然るに此豫言は端なくも全く外れたのである、先づ第一の豫言に就いて聊か批評を致しますと、成程形式に於ては適中したやうであるが、仔細に其内容を考へて見ると第一の豫言も當つては居らない、彼の世間に有り振れたる皇帝毒殺説の如きは跡方もなき無根の事實であつて、斯の如きことを口にすることも誠に思はしく、又畏れ多いことである、御同様術も清國の大不幸清國の凶事に對して滿腔の哀悼の意を捧ぐるものは、斯の如きことを輕々しく口にすることも云ふのは實に不謹慎な話である、大に慎むべきである、私が今日此演壇に立つのも一方は清國の皇室に對し、清國の國家に對し哀悼の意を表して、一面に於いては清國の事情に關して諸君に誤解のないやうに、其必要の爲に此演壇に登るのである、決して物好きに清國の事變を物珍らしく、事新しく、實際自分が見て來たからと

云つて鼻蓋かして、一の面白い話として、滑稽話として諸君の前に呈するものではない、癡馬鹿的に今度の清國の變事を批評し、殊に之を筆に口にするものは苟も清國に對して誠意を表する吾々日本人の輕々しくすべきことではない、若し諸君の中に斯の如き輕卒の言行に出るものがあつたならば今日以後大に懼まれて可なるべしと私は思ふのであります、西太后は確に始めに御不例であらせられた、萬壽節の頃から無理に無理を遊ばされて御老體のことだから非常に御疲れになつた、殊に下痢が加つたので非常に御衰弱の體で、或る清國人の語る所に依ると發熱が烈しくて非常に困へられたやうであります、

熱に苦悶されて居つたのである、之を見られた光緒皇帝は、殊に御孝心深き皇帝は三年の間の長の御病氣、殊に本年の夏秋の交りから連夜の遺精の爲め衰弱に衰弱を重ねて居らるゝ御身に拘らず、皇太后陛下の御危篤と見奉つて御自身を打忘れて晝夜の別なく寢食を忘れて御看病、遂に御自分の病勢を進められて致なく御果てになつた、之を御病床の中にあつて聞かされた西太后陛下は非常に御動哭、其結果遂に皇帝の跡を追はれたと云ふことは隠れなき事實である、御二方一時の御隠れ、不斷から御衰弱垂死の體の御二人が一緒に此世を去られるのも何かの因縁で、決して斯う云ふことはあり得るものでないと思ふ、

即ち是は宮中の平和で、其他色々の風説がありましたが、慶親王が今度の凶變の間に東陵に使に往かれた、慶親王が東陵に使に往かれたのは往つたのではない、あれはやられたのだ、慶親王を出し抜いた醇親王派の仕事である、斯様に言ふ人がある、是は又餘りに邪推の過ぎた話である、何處迄も支那を水滸傳的に解釋する一部の支那通の誤りである、慶親王殿下は會議の

定る其朝未明に急を聞いて東陵より歸られた、御屋敷に御歸りもなく直ちに前門外の停車場から宮中に參内されて此大會議に列せられ、午後二時に大事始めて定つたと云ふのを見ても慶親王が出し抜かれたなどは以ての外である、其他皇后の殉死説、袁世凱の自殺説の如き、日本の或る新聞などには寫眞まで掲げて哀悼の意を表するものもあつたやうであるが、餘り早まつた話で殊に袁世凱氏の自殺説、後に起つた袁世凱氏の負傷説の如きは、常に袁世凱氏の信任をして居る或る外國の醫師が外科の器械を持つて袁世凱氏の屋敷に這入つたと云ふので、外科の器械を持つて這入つた以上は怪我をしたに相違なからう、斯う解釋した説であつて、其外科の器械と見たのは何ぞ圖らん電氣器械であつたのである、(笑聲起る)袁世凱氏は豫てより「リヨーマチ」を患へて居られる、丁度私が北京に這入つた其當時も「リヨーマチ」で二週間の暇を貰つて出勤せしめて自宅で療養して居られた次第であつた、今度の皇帝の大事に當つて病を押して參内して宮中に詰切りで丸で外に出て來ない、這入つた切り出て來ないから借どうかされたのでないかと云ふのは臆測の甚しい説で「リヨーマチ」で冷へ切つて非常に苦しむ、殊に支那の例として日に三回兩宮の柩の前に出て哭禮をやる、中々堪へられるものでないさうで、段々「リヨーマチ」が甚しくつたので少しく用の閑を見

て自分の家に歸つた、さうして自分の最も信任する我國の平賀軍醫正を天津から呼寄せ、電氣器械を持つて來て電氣療法で以て「リヨーマチ」を治すると云ふので呼寄せたのが事實である、又慶親王は御危篤である、張之洞も今度の事變で平常の老衰が頓に加つて危篤であると云ふやうな説まで傳へられたやうだが、是も跡方もなきことである、勿論慶親王殿下と云ひ張之

洞氏と云ひ年が年であるから今度のやうなことがあつて見れば幾分か疲れたのは勿論の話である、張の洞氏や慶親王殿下のやうな七十以上の老翁さんが國家の大事變に當つて幾分か疲勞する位のは當然の話である、丁度二十日の日でありましたか外國の公使が皆打揃ふて宮中に參内して兩宮陛下の御極の前で弔禮を行つたことがある、是は一方から申すと清國政府の方で内外に妖言百出するから、實際の模様を明け放しに見せて安心させやうと云ふ一の政策であつたかも知れません、兎に角外國の使臣が皆兩宮の極の前に出て弔禮をした時分に、慶親王始め死んだと思つた連中が皆顔を描へて現れた、お前さん御機嫌でしたかと云ふ話で、是に於て始めて外國人の疑心も解けたのは事實である、何處迄も宮中の模様は極めて平和である、兩宮陛下は天壽を完ふして御他界遊ばされたのが事實である、萬事は何處迄も公明正大、少しも民に隱す所なく、何も彼も開放的に發表されたのが私の第一に掲げた宮中の平和と公明と云ふ意味であります。(述べ來り述べ去つて時餘に互る聽衆稍動く)

後策に就いて清國政府のやり方の周到にして而も敏活で從容として追らない態度、其手際の立派なことは思ふに諸君も私と共に驚き且嘆ぜられた所であらうと思ひます、そこで色々想像が諸君にも浮ぶてありませうが、北京に現在居つた私にも色々想像が浮んだ、實に意外だ逆も斯うあらうとは思はぬ、裏はドン／＼發表する、演習はやる、一部の經濟界の恐慌が起つて或る一二の銀行が取付に遭ふと云ふことが分れば度支部と云ふ日本で云へば大藏省から百万兩を出して救済をする手際の如き實に巧なもので、此善後策の如何にも巧妙を極めて居るのを見て、是は何しる政治の中心は攝政王になられた醇親王と云ふことは分つて居るが、醇親王御自身の御腕前として憚りあることであるが餘り出來過ぎるやうだ、成程醇親王殿下御年僅かに十九歳の時に義和團事件の後を承けて謝罪使として獨逸伯林に使されて、カイザーの前で跪く禮をせよと命ぜられたに拘らず、毅然として跪かぬ苟も一國の君主を代表した余は對等の君主の前に跪く譯はないと云つて押通された位の非常な剛毅な方と云ふことは曾つて承つて居る、けれども何分にもまだ御年配を申上げて御二十八と承つて居る、まだ御若い、其御方の御腕前として餘りに出來榮へが善過ぎるではないか、是は何か醇親王殿下の後ろに黒幕があるに違ひない、其黒幕が大に手腕を振つたものに違ひない、其黒幕は誰だらう、果して誰が黒幕に立つたかそれを一ツ調べて見たいものだと思ふのは別段相互に言ひ合した譯ではないが、北京に居る吾々友人は申合したやうに其方に研究の鋒先を向けて行つた、袁世凱氏だらうか張の洞氏だらうかどなただらうと色々頭を悩まして見たが、到底見付からなかつた、見付からないのも道理、段々調べて見ますと今回出來榮へと云ふものは決して一人や二人の豪傑のした仕事ではなくして王公大臣の一致、軍機大臣を始め大會議に參與された方々が國家の安危社稷の興亡を双肩に荷ふて私の怨を忘れ、政黨派の別を捨て、公共心を奮ひ起し、忠誠堅忍の心を以て國家の危機に盡瘁せられた其力であると云ふことを研究し得たのであります、殊に慶親王醇親王は兎角反目の中である、仲が御悪いなどと云ふ説がある、是亦丸で跡方なき無根の説であります、今度醇親王殿下の當らせられた地位は如何なる地位であるか、諸君御承知の通り攝政王と云ふのである、謹んで清朝の歴史を案んじて見るに攝政王と云ふことは清朝三百年の歴史に於てタツタ一回しかないことでありませう、成程先代の醇親王の如き攝政王に似たやうな地位に立たれたが、攝政王ではなくて議政王とは言はれた、順治帝時代の鄒親王の如きは輔政王と申された、攝政王と云ふのは順治帝の時分に醇親王殿下が攝政に當られたことが後にも先きにもタツタ一回である、而も今度の上諭で見ますと曾に攝政王と云ふ計りでなく、二十二日に政治官報を以て發布された上諭に依ると、「特命攝政王爲監國」とある、此監國と云ふ二字は非常に重い、所有軍國政事、悉乘承予之訓示、裁度施行現予病勢危篤、恐將不起、嗣後軍國政事、均由攝政王裁定、遇有重大事件有必須請皇太后懿旨、由攝政王隨時請諭施行、欽此」とある、實に重大な地位で、事實上の皇帝と申上げて差支ない地位である、前の上諭に仕舞の方に重大な事件あるに遣は、皇太后に何へと云ふことが書いてある、皇太后と云ふのは光緒帝の皇后で其方に何へと云ふことが書いてある此終りの文句は要するに餘り重きを置かぬでも宜いものと私は解釋する、斯の如き重大なる地位に醇親王が立たせられる、其事を

發議した人は誰であるか、世間では醇親王と慶親王の間に大儀も當ならざるやうに仲間割れがして甚だ不和であると云ふやうに言ふ人があるが、現在其慶親王殿下が最も此事を定むるに就いて有力な主張者であつたのである、醇親王殿下は年餘未だ三十に充たず、負荷の重きに堪へないと云ふ所から固く辭せられたるに拘らず、慶親王殿下は今君にして立たなければ國家の社稷を如何にせんと激勵された、遂に然らばと云つて立たれた次第から之を見ても、慶親王と醇親王が不和の説の如き無根の最も甚しいと云ふことを茲に諸君の前に特に紹介する譯であります、殊に今度の兩宮の崩御に就いての喪の發表の如き、先刻來申上げる如く今迄の歴史に徴して見ると皇帝皇太后の崩御を直ちに發するなどと云ふことは極めて例の少ないことであつて、多くは一月なり二月なり後に發表するのが例であるに拘らず、今度は而も兩宮陛下引續いて崩御であるに拘らず、端から何の忌憚する所なく遠慮する所なくドン／＼發表して仕舞つたと云ふが如き、是亦王公大臣一致の力に基いたもので、支那立憲の端緒を開いたものとして私は非常な喜を以て迎へたのであります、支那の立憲と云ふことは今迄言葉にばかり現われて居つたのを事實の上に立憲の端緒を開いたのは、秘して喪を發せずと云ふ舊慣を打破して端からドン／＼發表された此手際にあると深く感嘆する次第であります、又皇帝陛下の崩御に臨まれて降し賜つた御遺詔を拜し奉つても其意向が惘然立憲問題に就いて言及されて、朕は死んでも九年後に立憲制を施行すると國民に誓ひしことを忘るなよ、此大事を誤るなく朕が在天の靈を慰めよ繰返し／＼説かれたのを見ても、如何に憲法に熱心されたかが分るのであります、要するに清國の賢明なる政治家、賢明なる王公大臣の手

際の一部の東洋通の批評した如き水滸傳的のものでなく、三國誌的の如き決して隠秘的のものでなく、開放的、進取的、立憲的になつて居るもので、私は此事實を見て之を確め、非常な喜を以て清國の前途を見るものであります、先づ其位にして第三に掛ります。

王公大臣の此の一致あり始めて此る兇事に處して事無きを得たる所以を説き尙ほ此後に於ける國民の平和を思ふの念に切なるを説て曰く

清國の國民が今度の皇室の大事に當つて誠心正意を捧げて哀悼の意を表し、ガタリとも云はさない、皆人も我も話し合つた。の如くに頭を垂れて己の父を失ひ母を失つた如く靜肅に路傍を歩いて居るのを見て私は一種異様の感に打たれたのである、各學校に於ける哭禮、毎朝學校へ往つて泣く禮があります、ウツアと云ふのださうで、各學堂に於ける哭禮は、崩御から向ふ百日の間剃刀を當てることが出来ぬ、嫁を娶ることも出来ない、斯う云ふことは別に見て見ましても、外を歩いて見ると支那の家は諸君の中には御承知の方もあらうが門の兩側に對聯と云つて赤い紙に字が書いて貼つてある、是は文句は色々あるがどんな所に往つても貼つてあります、例へば「帝德如天」と此方に書いてあると此方の門の柱には「臣心似水」とある、對句である、それを對聯と云ふ、風呂屋でもさうだ。

金雞未唱湯先熱
紅日東昇客滿堂

と云ふやうな文句が深山ある、皆赤い紙で貼るか、扉に彫刻したのなれば赤く塗つてある、是が崩御と云ふことが世間に公にされて其翌日私は朝早く起きて外に出て見た、一體支那の國民が此大事に當つて國家の裏に當つて如何なる態

度を取るであらうと云ふことを研究的に見んが爲めに早く起きて出て見ると、丸で向ふ三軒兩隣皆寄つて集かつて申合せたやうにドン／＼起きて赤い紙を剥がして仕舞ふ、まだ御布告も何も出ないのに進んで赤い紙を剥がす、さうして板を赤くしてあるのは黒い墨を以て赤い所を塗つて仕舞ふ、紙なら剥がして青い紙或は黒い紙を貼つて置く、看板まで眞黒にして仕舞つたり或は黒い布を以て赤い看板を蔽ふて仕舞ふ、或は白い切れ黒い切れを用ゆる、支那の人の帽子の頂にポツチがあります、不斷赤いポツチを付けて居ります、自分の父親が死んだとか母親が死んだとかいふ場合には赤いのを取つて白いポツチか黒いポツチを付けるのが例である、それと同じく誰を見ても黒い、黒い糸のが得られない人は赤いポツチの上を青い紙か黒い紙で包んで居る、それはどんな下流社會の人でも赤いポツチをして居るものは一人もない、紙屑拾ひでもポツチはチヤンと黒くして居る、實に整頓したもので、それから着物にしても身分ある人な羊の毛を裏に付けた着物を大抵持つて居る、其羊の着物を裏返しにして着る、羊の毛が外へ出て眞つ白になる、皆白衣です、身分のない人は白い木綿を黒い着物の上に纏ふて居る、それも出来なければ普通の粗服の上に纏ふて居る、皆惰／＼として一人として面白さうな顔をして居る者はない、私は之を見て清國の平和の國民と云ふことを感ずると同時に、此話は伊集院公使閣下としたのであるが、御互ひ日本人でも斯ふ整頓して規律整然と法律を以て束縛する如く一時間二時間の間に萬事の設備が是程哀悼の意を表することが出来やうかと話し合つたが、伊集院公使閣下も實にさうだ、感ずべき民だ平和の民だと喜ばれた話があります。

即ち北京城中の現實狀態を視て其平和

思想を立證し一面には北清事變の時に比し北京の武力の整頓増加せられたるを實際的に其調査を援引して曰く

清國の平和は王公大臣の忠誠に因つて維持されたるのは前申した通りであるが、それだけではいかぬ、武力を必要とする、兵備を必要とする是れ平和の保障である、此原稿は今度私が滞在中に諸君に御話する材料と思ひまして聊か苦心して調べました北京城内に於ける清國軍隊配備の表であります、細かいことに逆も御話し盡せませぬが其大體だけを申して置くことに致します。

(一) 第一鎮
(二) 第六鎮

一鎮と云ふのは一箇師團の兵で、此第一鎮と第六鎮と云ふ二箇師團の兵は諸君も御記憶の如く督て直隸總督の任に在つた時分に袁世凱氏が中央陸軍部に献上された新式の訓練を経た精銳の軍隊であります、今現に北京に留めて居るのが此第一鎮と第六鎮の二箇師團であります、第三からは少し舊式になつて來ます、

- (三) 宿衛軍
武衛左軍
護軍營
步軍營(一營ハ五百人宛)

- (四) 巡捕五營
神機營親軍隊
順天府馬步巡隊
內外城巡警
鐵道護衛巡警

是だけが北京中央の戦闘力です、尙此外色々ありますけれどもそれは殆ど實力の無いものでありますから茲に之を畧することに致します、此兵隊の總數は表面上は四萬七千九百七十九名、

是は表面上の兵數です、其實數は四萬七千二百七十九名、少し減つて居る、是が實數です、此中銃器を持つて居るものは過半數である、銃器を執つて居るものを計算すると二萬七千六百四十五人と計上される、是が中央の武力で、中央の武力は斯の如く意外に強くして壓力の意外に重いことを私共は深く知つた譯である、是が一の平和の保障である。

と説き今や結論に移らんとして掉尾一番して曰く

先づ是だけを列記して意外に平穩であつたことの説明に致しますが、之を要するに今回の未曾有の大凶變に際したに拘らず何事もなく非常に平穩無事に此時局をやり過すことが出来たと云ふものは決して一人や二人の豪傑の力が茲に現れて其人の働で出来たと解釋すると非常な間違であります、一人二人の働で今日の出来榮へを見た譯ではない、要するに今回の時局は清國國家の進歩を吾々に語るものである、國家の進歩した爲め今日の時局に際し兩宮陛下引續き崩御になつたに拘らず國家の機關は不斷の如く運轉しつゝあります、上は至尊より王公大臣を始め下庶民に至るまで國家全體の進歩した結果である、今迄世間の人殊に東洋通は——吾々も其一人で甚だ不明を愧るものであります、世間の人殊に東洋通と云はるゝ人は清國を見くびつて居つたのである、之を露骨に申せば聊ながら清國を輕侮して居つたのである、輕侮して居つたが爲に、若し西太后皇帝兩陛下御崩御の曉には支那は亂れるだらう、大亂になるだらうと思つたのは清國々家國民に對して申譯がない、私は謹んで茲に御話をするものであります、清國は既に吾々東洋通の今迄想像した如き秩序のない規律のないものでない、既に國家の素養は次第

に備つて完全に築かれつゝあつたもので、諸君と共に今回の清國の事變を見て新支那の勃興を知り、其本統の價値を知るを喜ぶと共に幸い諸君に御願ひして今日御集りにならぬ諸君の御知己に向つてまで清國の實際の勢力を御傳へになつて、以て是から何處迄も相互的交誼的平和的に日清兩國の間を結びつけなければならぬと斯様に深く信じます、然らば今後の豫想はどうであるか、是は結論であります。

結論として今後の豫想に移れり、曰く

今後の豫想はどうであるかと申しますと、簡単に述べ終りますが、私の想像に依ると是から以後清國政界の新局面と云ふものは愈々開發的になり、愈々立憲的にあるのは疑ないと思つたものであります、西太后の崩御になつたこと、皇帝陛下の崩御になつたことは諸君と共に御同様に誠に悼むべきことでありますけれども、一面國家政局の開展、政局の新局面は誠に諸君と共に又慶賀しなければならぬ状態にあると思はれる、西太后が崩ぜられたならば國が亂れるだらうと云ふ豫想は既に外づれた、是が外づれた以上は清國の國家の中心は西太后御一身に繫つて居ると思つた想像は全く外れた、清國國家の中心は決して西太后御一身でなくして清國四億の國民全體であると私は信じます、其清國の中心たる國民にして愈々進歩したならば清國の國家は愈々健全になり、非常に立派な勳がすべからざる鞏固不拔な大帝國を形造くることは疑ひないと思ひます、伏魔殿と世間の言ふ如きものは西太后御在世の折のことで、崩御になつた後は伏魔殿は開放されるに違ひない、伏魔殿は開放されれば男妾見たやうな官宦などは必ず放逐されて仕舞ふに違ひない、伏魔殿にして開放され、官宦にして放逐されたならば宮中府中の別荘に始めて明らかになり、今迄西太后陛下御一身の一

筆一笑に依つて政權が或一二の大臣に偏重すると云ふ弊は是から以後はなくなると思ひます、今迄西太后がお前は可愛い、お前はうい奴だお前の言ふことは國家に忠良の心を盡すものであると御可愛がりになると、其一人は非常な卓絶せる勢力を得て逆も他の者の拮抗すべからざる政權を握り、又非常な野心を逞うし、國が亂れることがあつたが、既に西太后が崩御になつた今日、醇親王は國家の柱石として幼冲の新帝を輔弼し奉り、慶親王は老年である先輩である

と云ふ意味を以て醇親王の足らざる所を補ひ、是に於て清國の政界は何處迄も立憲的となつて例へ軍機大臣の間に聊か政治的野心を逞うするものがあつても己の野心を逞うする餘地がなく互に相寄り相待つて一の日本の内閣に近い合議政府を造ることが近きにあると深く信じます、若し果して然りとしたならば、今日の時局をして愈々平和に解決し、愈々平和に之を持続することを得たならば、一部の革命黨の如きは遂に己の立つべき勢力の無いことを自白する譯である、又嘗て清國を聊か輕侮して居つた外國が假にありとしたならば、其清國を輕侮して居つた一二の外國も是から以後は大なる尊敬を清國國家國民に拂つて復た其の鼎の輕重を問ふことなきに至ると信じます、茲に謹んで兩宮陛下の喪を悼み奉ると同時に清國政界の新局面開展に對して滿腹慶賀の意を表するものであります、拍手大喝采(明治四十一年十二月四日早稻田大學大講堂に於て)

此講演は十二月初旬に在り。其後袁世凱氏退隱の事あり然れども大局に對しては差の變動なし。袁世凱退隱に關する氏の論文は外交時報一月號に在り。

會 合

▲英語會新年計畫 早稻田英語會は本校在學の有志者に依つて計畫されて以來着々として其功果を擧げて來たが新年と共に尙ほ下の五氏を推薦して一大飛躍を試みるといふ。本校講師勝俣銓太郎氏、現本會講師北島夫人、ドクトル、フイ、服部文四郎、ドクトル、オプ、吉岡源一郎氏、高等豫科長田島榮氏。尙ほ本月には盛んなる集合あるべしといふ

▲早稻田音樂會 一月中旬より研究を始めた。研究日割は火曜十二時より一時、木曜四時より五時迄。

▲佛語會 一月十八日(月曜日)より授業開始。

▲早稻田大學基督教青年會新年大會 一月廿日(水曜日)午後四時同寄宿舎に於いて開催。杉山重義、小松武治、丹羽清二郎、ベニングホフ、山本邦之助等諸大家の講演があつた。

●第百回雄辯會紀念大會 一月廿四日(日曜)午後零時半本校大講堂に於て開く。數日來雨雪に苦しみし學生は此日朝來の快晴に勇み立ち定刻前より會場

に犇々と詰めかけ開會前早くも滿員の狀を呈しさしも廣大大講堂も眞に立錫の餘地なかりき。當日の辯士及演題は左の如し

開會之辭 委員淺川保平●腐敗せる社會 學生辯士山森利一●年頭の感 同宮澤胤勇●唯此心あり 同中村鶴●大勢論 同坂入準三●余は何故に文壇に入れるか 田中會長●所謂排日問題に就て 代議士服部綾雄氏●時事所感 高田學長●名文乎雄辯乎 代議士島田三郎氏●未定 大隈總長

定刻に至るや委員立ちて開會の辭を述べ次に山森君登壇し現時の社會道徳の墮落を慨し次に田中會長は所用の爲め順席を繰上げて登壇して何故に余は文壇に入れるかに就きて自己の経験に合せて學生を訓誡さる。次に中村鶴君立て偉人英雄の人格事業を思ふ時は大なる希望を生ずも其然却却し易し自ら刺激して奮勵すべしと論じ次に坂入準三君登壇し世は今や擧げて黄金万能の時代なり金の赴く處に大なる力生ずと憤慨し次に服部綾雄氏立て明快熱烈なる辯を振ひ日本外交の不振を痛慨し旅券制度の不利を切言し、次に島田三郎氏は割るが如き拍手の中に立て例の快辯を以て辯舌の發達は自由の發達を意味とするものなることを痛言し能文と雄辯との両面より敬條の實例を擧げて之れを立證し終りに今や雄辯と同時に能文たるを得即ち速記術あるを以てなりと論じ雄辯即ち兼れて能文たり得ることを説いて降壇し、次に高田學長は、先づ半日聽き疲れたる聽衆に笑を與へ頭腦の疲勞を一掃し然る後雄辯に對する注意として、演説を研究すると同時に大に討論を勵むべく演説討論兼れ備はりて始めて雄辯を大成すべくこれが爲めには、其頭腦を明晰にせざるべからず、頭腦の明晰は心事の明晰に基くを以て小策を弄するの不可なるに論及し其國政治家の例を擧げて局を結はれたり。大隈總長は止を得ざる事故ありて出演せられず此の會同は實に近年稀に見る所の盛會なりし。

▲早稻田獨逸語會 是本月下旬開催の筈、尙ほ在獨逸ウイスマーテン萬國語學會より早稻田大學講師藤山氏へ宛て聯絡の旨を申越し藤山氏は語學會を代表して加入の旨を答へられたり。

運動

運動界。己酉の春を迎へた吾が早稲田大學運動部は多大の抱負と覺悟の前に立つた。然し春來の降雪は彼等の樂土を奪ひ包んで居る。野球界も庭球界も此處暫くは冬籠の體たらく、唯だ獨り冬の朝の空氣を振はして開えて來るものは寒稽古の勇ましい音である。

▲柔道部。一月十五日より來る十一日迄四週間の規定で、山内二段主となり毎日八九十名の有志者が未だ夜の明けぬ四時頃から六時頃迄激しい音をたて、相搏ち相闘ふ様は勇ましいと言ふよりは寧ろ怖ろしいやうな氣がする。

▲劍道部。是れ亦た柔道部と等しく十五日より開始し齋藤五級笹森五級主となりて五六十名の稽古を督勵し丁々々々の音四隣に響き渡つて、青年の血に胸に跳り堂に溢れて居る。

▲庭球部。庭球部の一行は此冬寒寒兼れ冬季練習として伊豆方面へ旅行した。該地に於ける彼等の生活は丁度眠つて居る獅子の如くであらう。

▲野球部も亦た庭球部と等しく眠るべく余儀なくされて居る。然し彼等の再び覺醒する時は帝國の運動界否な世界の運動界は震駭する時である。

▲端艇部。一月三十日一泊の豫定で柴又に遼瀋を試み日地川に甚だ無邪氣な新年會を催し、筑波風に胸を鳴して一同無事歸京した。



片々

●英國便り S U

日本より來る文學雜誌をみる毎になさげなく成り候、浮薄孱弱これが戰勝國の文學とはあきれ申し候。文學教育に對して小生左の考をいただき候。

純乎たる文學者は養成されべきものにあらず。現在の英國の文學者にして文學者たらんとして文學教育をうけたるものはまづ皆無に候。オックスフォードにて英文學の講座を設けしも近年の事に重にて教員養成のためなるべく候。男子に比して女子の聽講者が多いといふ話に候。

小説家は浮世の苦勞をなめざる可らず學校よりいづべくもあらず候。批評家は養成せざるべからず候。是は試験制度にて採用し小數の秀才を養成すれば十分と存じ候。日本の自然主義は文學専門教育をうけた連中の燒糞的反抗とも見る事が出來申し候。批評家たらんとするものには。歐米の歴史に通せしめねばならず候。近頃日本で露西亞の小説がはやり候が露西亞人はさすがにのび／＼致し居り候露西亞の小説家は日本の小説家のやうなヘッポコルはこれなく候。これ露西亞の地理、歴史、宗教、風俗をしらすして小説をのみ讀むためにルシアの糟粕をなめるに至りたるものと存じ候。今は科學と實業を奨励すべき時に候。しかし現今の日本の實業教育は生きたる機械を作る教育に候。ほんの間にあはせの教育に候。彼等はよると觸ると女の語でなければ夜があけ申さず候。獨逸の留學生の半分位はかゝる連中だといふ噂に候。彼等に趣味なし美術文學を知らず、ことに柏林の留學生は會堂を御寺／＼と呼んでルーテル、カルビン、ミラントン、シエラエルマツヘル、カントの大精神を學ぶ事をつとめず、獨逸の日本人が獨逸人にくまれ、きらはれ輕蔑せられ居るも無理なく候。英國の實業家の多數は趣味豊富なるものに候宗教談も文學談も政治談も出來候。日本では是れまでのやうな間に合はせの人物をのみ作つた日にはいくら實業が盛大になつても結局民族の大損失に候幾分か古典教育、趣味教育を加入したきものに候。よりに小生當分文學志望者に便利を與へぬ方がよろしく候早稲田の文科の學生は多過ぎる様に考へられ候。

御承知の通り東洋諸國民の物與は英人を驚かし居り候。基督教の先覺者は神の働きたりと呼び居り候。シテアンブルのキャンベル氏は先達當校に來りて説教して曰はくこれ神の大波なりとウエストミンスターチャペルのモルガン博士は曰く神いま東洋民族の間を歩み給ふと英國の基督教にほれ／＼させられる所は此邊に候。而して東西本願寺の醜態はみられたものでなく教育家も宗教家も政治家も對岸の火事視致し居り候。日本人の良心のねむれるも著しいかなに候。而して識者の論はこの運動の誘起は日露戰爭の結果なりと申し候。日本の責任はます／＼大。然るに日本の青年男女の大勢を見る。自然主義だの煩悶だのと蟲がよい話。しかし是れは先輩の罪惡に候。桂侯の不品行を以てして大詔を賜はりて風紀刷新とは片腹いたき話に候。かゝる事を考ふると泣きたくなるばかり、不肖ながら日本の將來に盡すべき責任を感ずる事深く、専心勉學致し居り候。此頃は手前一時より早く就學したる事なく候。かゝる刺戟を與へられた丈け洋行は得であつたと存じ候。

序に申しあげれば學校の授業時間は多すぎる様に候。追々午前中授業をやり、午後は脅迫的に運動せしめ健全

なる體格をつくる事必要に候。

休中圖書館の閉鎖はいかゞと存じ候眞面目なるものにとりては非常の迷惑と存じ候。休中には學生の特志者に圖書館を開くべき事と存じ候。

歐洲の青年はつめ込み主義の教育をうけずと雖も消化したる知識を有し居り候。日本の學生は消化せざる知識をのみ蓄へ居候。

早稻田が帝國大學以上の人物を輩出せしむるためにはまづ德育の大方針を定むること必要に候。今の處はあまり混沌すぎる様に候。第二、體育、運動の勃興は何よりうれしく候。講師と學生と個人の關係をつくること第三に候。學校が授業料によつて維持せらるゝ境遇を脱して授業料は單に一部分費用にあつるといふやうな時をみたきものに候。

●米國便り

S T

▲ノックス大學在學中の高尾佐吉氏は異講師に當て、該地の模様と同時に日米協約に關する意見とともに新聞紙の切抜きを送附された。先き頃の日米協約に關して米國議院では物議を起したといふのは米國憲法上條約は上院の許可を得なければならぬのに大統領は獨斷を以て處決したのは憲法を無視したものだといふのださうだ。是れに對して當局者の辨解は面白い、あれは條約

ではない理解だ (understanding) といふのださうだ。何れにせ此の條約はアメリカでは一般に好意で迎へられて居るのは事實である。

●アウトロツク瞥見

早稻田二十四景詩

文明餘澤及田家 隘巷新開路八叉
百花爛漫衆禽啼 風暖晴郊淡靄迷
千歲池荒竹樹冥 廻巖何處送龍腥
花笑柳眠烟水前 嬌枝低佛美人船
落花啼鳥韶光老 勝地無人風浩々
父老荒唐傳口碑 金川已入昔人詩
斷續鐘聲送夕曛 幽篁誰掃落花紛
怪石龍盤擁老梧 苔花埋翠翠雲敷
野橋倒影倚浮萍 一水溶溶萬古青
巨流一道自西來 崖樹根搖石壁摧
林表嵯峨綠陰移 石林吹熱綠陰移
城門日落煮羹危 遊客追涼度野岬
新秋瀛氣洗山川 碧落無雲曉色妍
仙翁一去跡寥寥 當日遺吟隱思饒
朱殿高臨碧洞阿 仲秋遊例奏笙歌
閑昔將軍埋錦兜 地荒塚古草花稠
烟外微聞野寺鐘 畫情詩思此中鍾
閑裏沙場戎馬間 名莊新築在椿山
箭入孟冬風景幽 野溝水涸稱雲收
柳營公子駕青驪 眼尾閑遊賞雪時
黃楓紫菊映紅紗 甲第秋開仙洞霞
春光未動帝王州 昨夜寒飈卷古丘
文華日進國光揚 學舍南隣調武場
雪絮霜凡度三冬 不許書生殘夢慵

菊池 晚香

謁見の前夜就褥の模様から書き出して枕は糠をつめた大變に固いもので「翌朝私達は悪夢に襲はれたやうに感じました」といつてるなどは面白い。其れから翌朝——水曜日の朝——嬢の一行

▲西太后との謁見——先年一九〇五年タフト卿の一行と共にフイリツピン、支那、本邦等へ來遊せるボールドマン嬢 Miss Boardman の西太后謁見の記事は近刊の『アートルック』に出て居る。筆者は女丈けに記述は余程微細で面白い

は可成的支那の喪服色を避けて花やかな装をして出た。羽根付きの帽に美しいリボンをして。其日ルーズヴェルト嬢は大きな黒い帽子に石竹色の布をつけて居た。其れからいよゝゝ西太后と皇帝との謁見の場に至つて精細な批評がしてある。髪は非常に黒い、多分人口を施してあるのであらう。上着は、暗綠色で奇麗に刺繍を置いて居る。最後に「黒味のある目は大變に輝いて鋭敏さうに見えました、そしてあの方の微笑は自然で、引力があつて大變に心地能く感じました。」としてある。

●アセニヤム瞥見
▲ケムブリツヂ大學の出版と同大學ではヒューム・ブラウン教授の『スコットランド史』History of Scotland を印刷に附した。是は一六八九年の革命から一八四三年の事件までが含まれて居る。

●東京毎日新聞の刷新
▲東京毎日新聞は今回武富氏新たに之れが社長となり本校講師商科教務主任田中氏之れが主筆となり、本校出身の俊才十數名を選抜し政治、經濟、教育上は勿論百般に亘りて其雄勁侃諤の所論を揮ふへしといふ。

●世界一周會
▲内外仲介社は此度世界最大旅行會社なる「トーマス、タツク社」と聯合して世界一週會なるものを組織し歐米を漫遊せんとする日本人の便利を圖り普通の五分一の費用を以て其目的を遂げ得る計畫を發表して居る。日数は四ヶ月費用は僅かに三千二百五十圓である。

●高田博士宅新年謠始

▲一月十七日十二時頃より學長高田博士宅で寶生流の謠始會を開催し其曲目は一、鶴龜、一、羽衣、一、熊野、一、草紙洗、一、弱法師、一、千手、一、鉢木の七番であつた。

當日の出席者は●前島男爵●高田博士●天野博士●大隈信常●平沼淑郎●田原榮●今井友次郎●田中唯一郎●土屋詮教●平野應道●山田太一郎●岡崎密乘●小久江成一●高田夫人●藤山夫人●今村夫人等の諸氏

中には初心の人であつたけれども何れも立派な出来、就中夫人連の千手の謠に至つては三役共に何れ劣らぬ名調で男子連は顔色なしといふ有様であつた其他前島男爵の弱法師、高田、天野兩氏の鉢木に至つては大いに聽者を酔はしめ、尙ほ最後に高田夫人の鼓にて田中氏の蟬丸の仕舞は中々の出来であつた

新年偶成擬青柳先生

欲雨欲風天色幽。燕雲暗澹轉堪愁。滿城齊醉屠蘇曉。獨坐關心四百州。

李軒生



新刊批評

勉めて平易に著書の骨子、主眼、精神、價值に向て短評を下すのである

●學修法

澤柳政太郎著 同文館

校友諸君に告ぐ

來二月十一日紀元節に帝國憲法發布滿二十年紀念式典舉行候間御來校被下度此段御案内申上候也

二月一日 早稻田大學

追而當日舉行順序は本文記事御参照被下度候

(本誌第二頁)

學修法は澤柳政太郎氏の近著である。氏は此書の序文中に言つて居らる、様に從來の教師本位の教育學教授法以外に學生の爲めに懇切に勉學の法を示すのが目的である。緒論、學修法總則、知識の修得、徳性の修養、身體の發育、専門學科及び職業の選擇の六章に渡つて一種穩健な教育觀に依つて適切な解釋と教示を與へたものである。

(定價八拾錢)

●足利尊氏

山路 愛山著 玄黃社

是は氏が日本英雄傳の第一編として出したるもの第一章北條氏の執政及び其時代より第五卷足利氏武人に擁せらるゝに至るまで史實と神史に根據を置いた例の愛山一流の奇抜な評論である。序文「マコーレー卿の所謂好んで史家の文牘を破壊するものなり」なほは少々時代遅の感はあるが、然し冷靜な史眼の内に此英雄に對して涙を拂はしむるの

●普通文章論

幸田露伴著 博文館

序文の中で著者が述べて居るやうに古來から世間と言ひ慣はして來た「文章善くし難し」といふ平凡な言葉に實用的な解決を與へる目的で書いたものである。(定價七拾五錢)

●最近獨逸文學の研究

片山孤村著 博文館

本書は著者が最近諸種の定期刊行物に發表した論文又は翻譯を纂輯したもの、上篇には神經質の文學以下新戲曲家フランク・エーテキンド、中篇文學と人格以下ポール・エルレノ、下篇には最近獨逸小説史を收めて居る。(定價壹圓)

●世間學

巖谷 小波 服部書店

著者は序文で言ふて居るやうに此書は著者一流の常識と奇智を以て世間を知るの學を氣焔交りに説いたものである。(定價四拾五錢)

●露國名著白夜集

昇曙夢著 章光閣

此書は著者一流の鋭い譯文に依つてツルゲーネフの草場以下プーシキンの吹雪、コロレンコ奇火、チエーホフ空扶斯、拳銃、コリキイの悪魔等の短篇を翻譯したものである。(定價壹圓)

●圖書館へ寄贈を受けたる書目

- ▲ゴルドン夫人寄贈書目左の如し
- 1. Holy Bible The Palestine Pictorial Bible..... 1 vol.
- 2. Richard, T.—Conversion by the Million in China..... 2 vols.
- 3. Stoddart, Anna M.—The Life of Isabella Bird..... 1 vol.
- 4. A Memoire of John Mason Neale... 1 vol.
- 5. Graham, G. C.—Santa Teresa..... 1 vol.
- 6. Westcott, B. F.—The Gospel of Life. 1 vol.
- 7. Bird, R.—Joseph, the Dreamer..... 1 vol.
- 8. Williams, J. E. H.—The Life of Sir

George Williams..... 1 vol.
 9. Hall, Ch. C.—Christ and the Human Race..... 1 vol.
 10. Hingworth, J. R.—Christian Character..... 1 vol.
 11. Westcott, B. F.—The Historic Faith: Short Lectures on the Apostles' Creed..... 1 vol.
 12. Johnston, J. O.—Life and Letters of H. P. Liddon..... 1 vol.
 13. Stoddart, Anna M.—John Stuart Blackie. A Biography..... 1 vol.
 14. Farrar, F. W.—Gathering Clouds. 2 vols.
 15. Hare, A. J. C.—The Gunneys of Farham..... 2 vols.
 16. Scott, Sir Walter.—The Journal of Sir Walter Scott..... 2 vols.
 17. Jernigan, T. R.—China in Law and Commerce..... 1 vols.
 18. Little, Mrs. A.—Round about My Peking Garden..... 1 vol.
 19. Abbott, G. F.—Israel in Europe... 1 vol.
 20. Landon, P.—Under the Sun..... 1 vol.
 21. Landon, A. H. S.—Across Widest Africa..... 1 vol.
 22. Landon, P.—Ithaca..... 2 vols.
 23. Max Müller, (Mrs.)—Letters from Constantinople..... 1 vol.
 24. Little, Mrs. A.—The Land of the Blue Gown..... 1 vol.
 25. Landon, A. H. S.—In the Forbidden Land..... 1 vol.
 26. Mackintosh, C. W.—Collard of the Zanbesi..... 1 vol.
 27. Schofield, A. T.—The Forth of Mind;

or the Mental Factor in Medicine... 1 vol.
 28. Across Covered Lands..... 2 vols.
 29. Townley, S. (Lady)—My Chinese Notes Book..... 1 vol.
 30. Treves, Sir, F.—The Other Side of the Lantern..... 1 vol.
 31. Hedin, Sven—Central Asia and Tibet..... 2 vols.
 32. Sewell, E. L.—The Autobiography of Elizabeth M. Sewell..... 1 vol.
 33. Hodder, E.—The Life and Work of the Seventh Earl of Shaftesbury. K. G..... 3 vols.
 34. Müller, F. Max.—My Autobiography..... 1 vol.
 35. Trevelyan, G. M.—Garibaldi's Defence of the Roman Republic..... 1 vol.
 36. Barrett, R. M.—Ellie Hopkins..... 1 vol.
 37. Rappoport, A. S.—The Curse of the Romanovs..... 1 vol.
 38. Memoirs of B. Dr. Thomas John... 1 vol.
 39. Tooley, S. A.—Royal Palaces and their Memoirs..... 1 vol.
 40. Benson, A. C., etc.—The Letters of Queen Victoria..... 3 vols.
 41. Hamilton, Sir Jan.—A Staff Officer's Scrap-Book..... 2 vols.
 42. Weale, B. L. P.—Indiscreet Letters from Peking..... 1 vol.
 43. Wallace, A. R.—my Life..... 2 vols.
 44. Loewe, L.—Diaries of Sir Moses and Lady Montefiore, 1812—1883. 2 vols.
 45. Villari, P.—Studies Historical and Critical..... 1 vol.
 46. Wilmot-Dutton, E. M.—A Book of

Noble Women..... 1 vol.
 47. Gorst, H.—History of China..... 1 vol.
 48. Anderson, Sir R.—Criminals and Crime: Some Facts and Suggestions..... 1 vol.
 49. Paton, J. B.—University Education: al Missions for China..... 1 vol.
 50. Smith, Mrs. A. M.—The Roll-Coll of Westminster Abbey..... 1 vol.
 51. Horton, R. F.—My Belief..... 3 copys.
 52. McCaul, E.—Under the Care of the Japanese War Office..... 2 copys
 53. Fawcett, Mrs. H.—Five Famous French Women..... 2 copys.
 54. Fitchett, W. H.—Deeds that won the Empire..... 3 copys.
 55. Weale, B. L. P.—The Truce in the East and its Aftermath..... 2 copys.
 56. Gordon, Mrs. E. A.—The Temples of the Orient and their Message. 2 copys
 ● 其他の寄贈 前項の外尙最近の寄贈に係る分左の如し
 The Eighth Financial and Economical Annual of Japan, 1908..... 1 vol.
 右大藏省寄贈
 Kirk, T.—The Forest Flora of New Zealand..... 1 vol.
 右シムニーノ人レンセシモー氏寄贈
 Bulletin of the American Library Association..... 1 vol.
 右亞米利加圖書館協會寄贈
 Gillart, W. S.—Patience or Bunthorne's Bride..... 1 vol.
 右早稻田音學會寄贈

Bulletin of the Imperial Earthquake Investigation, vol. II, No. 3..... 1 vol
 右震災豫防調査會寄贈
 ▲其五——最近寄贈の和漢書 其後受付たる分左の如し
 支那語文法(石山福治氏著)一冊 文求堂
 蘆芽集 二冊 吉田彦一郎氏
 同治上海縣志(紀念寄贈) 一函十六卷 王煥功氏
 新潟縣下石油會社組合一覽表 一枚
 大日本帝國油田第八區地質及地形圖(三枚續) 一枚 農商務省地質調査所
 同上 說明書 一冊 同
 壹岐圖幅 一枚 同
 人吉圖幅 一枚 同
 同上 地質說明書 一冊 同
 輪島圖幅 一枚 同
 同上 地質說明書 一冊 同
 同上 地質說明書 一冊 同
 榎子句集 一冊 榎山俳書堂
 女俳家句集 一冊 同
 鳴雪句集 一冊 同
 時代と人物 一冊 笹川種郎氏
 東洞先生遺稿 三冊 故菅沼政吉追福紀念前田多藏氏
 梁山文集 五冊 同
 明治四十年 宮崎縣勸業年報 一冊 宮崎縣廳
 第四高等學校一覽(自明治四十一年)一冊 同
 工場災害統計表 一冊 農商務省商工局
 豫算詳解 一冊 大隅伯爵家
 近世殖民史 一冊 荒川信賢氏
 神戸商業會議所年報(明治四十一年度)一冊 同
 貴族院要覽(明治四十一年十一月増訂)一冊 同
 同院庶務課
 慶應義塾總覽 一冊 慶應義塾

第廿二次銀行及擔保附託債信託業報告

一册	大藏省理財局
六册	山越忍空氏
一册	高橋二郎氏
一册	國勢及市勢調査法
一册	同
五部五册	益田孝氏
一册	山口縣治一班(明治四十年)
一册	同
一册	青森縣治一班(明治四十年)
一册	同
一册	大阪市勢一覽(明治四十年)
一册	同
一册	明治四十年度宮城縣統計書(勸業、二)
一册	同
一册	續燕石十種 第一
二部	圖書刊行會
二部	同
二部	松屋筆記 第三
一枚	種村宗八氏
一枚	古佛像裏面經文摺物
一册	同
一册	海外新市場(同二編)
一册	同
一册	仕入と販賣(同三編)
一册	同
一册	輸出と輸入(同三編)
一册	同
一册	簿記と會計(同四編)
一册	同
一册	新民主義と積善組合
一册	新瀉積善組合
一册	積善組合巡回文庫はがき 一部
一册	同
一册	各府縣輸出重要品調査報告
一册	同
一册	(京都)兵庫愛知之部、附產業概況)
一册	農商務省商工業報十七、十八
二册	同
一册	保險年鑑
一册	同
二部	同 農務局
一册	大英治下之埃及
一册	井上雅二氏
一册	隨鴨集 四十九
一册	隨鴨吟社
一册	旅行案内(一月分)
一册	庚寅新誌社
二部	梅澤和軒氏
一册	書畫の愛玩
一册	同
一册	學詩存稿
一册	同
一册	第七高等學校造士館一覽(自明治四十二年)
一册	同
一册	長崎港外國貿易概況(明治四十年)
一册	同
一册	長崎税關

臺灣貿易概況(明治卅九年)

一册	臺灣總督府民政部
一册	倫理と文學
二册	坪内雄藏氏
二册	裾野(後藤街外著)
一册	同
一册	明治四十年度大藏省年報
一册	同
一枚	武藏國江戸庄鑑渡圖
一枚	千葉魯一氏
一枚	古楊木
一枚	同
一枚	武藏國隅田川名所繪圖(文化七、加賀屋板)
一枚	同
一枚	早見年代重寶記(嘉永四、江戸屋板)
一枚	同
二部	岩戸開道歌集
一册	同
一册	日本帝國卅七統計年鑑
一册	同
一册	音響と音樂
一册	早稻田音樂會
一册	近世樂典教課書
一册	同
一册	アラインド樂譜
一册	同
一册	株式便覽
一册	同
一册	第五高等學校一覽
一册	同
一册	國債調査
一册	同
一册	利學入門 東洋小野梓君
一册	東京交換所
一册	自註草稿 男爵 前島密氏

早稻田學會新刊寄贈雜誌

能樂(七卷一號)	能樂館
丁酉倫理會講演集(七十六號)	丁酉倫理會
東洋哲學(十六ノ一)	東洋大學
新佛教(第十ノ一)	新佛教同志會
國家學會雜誌(二六二)	同
成氏(三ノ四)	同
開拓者(一月號)	日本基督教青年會同盟
教育(三一)	若溪會
英語之日本(二ノ一)	同
實業俱樂部(七ノ一)	同
圖書月報(七ノ三)	書籍商組合事務所
Japan in Manchuria	同
朝河貫一氏著(エール、レビュウ)	同
法律新聞(五四三)	同

愛媛縣立松山中學校 學友會誌(六)

京都府立第三中學友會	同
法律世界(廿九)	同
不死法第四次的發展(一)	同
法律新聞(百四四號)	同
日本警察新聞(百〇二號)	同
帝國文學(十五ノ一)	同
Deutsche Japan-post	同
文藝時評(二ノ一)	同
丁酉倫理講演集(七十六號)	同
火柱(二ノ一)	同
哲學雜誌(二四ノ二六三)	同
六條學報(八七)	同
日本及日本人	同
サンデー	同
國學院雜誌(十五ノ一)	同
東京市養育院月報(九三)	同

本年度校友會維持費贖出人名

四十二年度維持費贖出人名左の如し

(以下逐號掲載すべし)

金五四宛	増田義一、森綱次郎、小松林藏、村島
寬岡、平田讓衛、土肥常七	金參圓五拾錢 野田
龍三郎	金參圓宛 谷新太郎、菊地武廣、吉田
信彦、田卷義平太、吉田銀治、西川太治郎、京谷	
勇次郎、北原種忠、上島長久、齋藤忠太郎、森田	
退藏、大西孝次郎、武藤剛、栗林讓輔、依田直次	
郎、小川寅六、新谷真次郎、中尾三郎、向後順一	
郎、進藤行雄、小野俊三、甲斐芳造、笹野鐵太郎	
山崎寅市、渡邊榮爾	金貳圓五拾錢宛 新井三九
郎、森美之輔、西本錢馬、本郷良吉、小川泰明、	
南彦朝、國井恒太郎、青鹿東	金貳圓貳拾錢 田
中際藏	金貳圓宛 今井銀一、沼澤密應、山内佐、
安藤文祐、田中信郎、鈴木茂雄、松岡恒太郎、丸	
岡茂吉、家坂幸三郎、平田龜之助、越智脩吉、龜	

井彦一郎、金子智、寺澤萬三、等々力正保、岡田
 猛熊、安田稔、田端稔、齋藤庫造、松木弘、高木
 眞木彦、荒川謙二、渡邊寅治、松井郡治、木塚常
 三、橋藤四郎介、内田竹三郎、坂田照三、鎮目一
 朗、伊藤幸太郎、板東陸藏、岩田賢、小西春雄、
 和田俊嶺、奥田佛、木多文雄、湯本仙吉、塚原喜
 秀、小西友次郎、森田勇次郎、劉崇傑、富田俊雄、
 永持徳一、杉八郎、吉村徳吉、關口昌、匹田鏡吉、
 水戸軍之助、紫安新九郎、三宅繁、岸本晋亮、横
 澤源三郎、三木武吉、酒卷景一、西村忠一、篠原
 彌吉、川上正光、青地雄太郎、石塚靜一、鈴木寅
 彦、古川勝次郎、中島半次郎、小野闕、伊藤瀨門、
 渡邊察作、三田幸司、牧野啓吾、齋藤隆夫、角取
 助治、松澤禮三、浦邊義夫、佐野万平、日高只一、
 大澤準二、上原鹿造、瀧澤善一郎、渡邊雅之助、
 牛場清次郎、神田正雄、片谷傳藏、金慶吉、木村
 喜一、丸田可平、鈴木伊十、武市俊明、加賀美幹
 二郎、濱田徳太郎、中川重政、鈴木文元、小川爲
 次郎、近藤潤治郎

定價 壹部郵稅共 金拾錢
 廣告料 一回一頁金貳拾圓半頁
 金拾圓四分、一金五圓

明治四十二年一月五日印刷
 明治四十二年一月五日發行

編輯兼 田中唯一郎
 發行人 東京市牛込區早稻田大學校友會

印刷者 東京市牛込區榎町七番地 渡邊八太郎
 印刷所 東京市牛込區榎町七番地 日清印刷株式會社
 發行所 東京市牛込區早稻田大學内 早稻田學會
 振替貯金口座一〇七四五番

- 本會社ノ資本金ハ壹百萬圓ナリ
- 本會社ハ保險契約者ニ利益ヲ配當ス
- 本會社ノ保險種類(終身保險、養老保險、教育資金保險)

社長 男爵 前 島 密 專務取締役 池 田 龍 一

本社 東京市京橋區惣十郎町五番地 電話新橋四二八一番



日清生命保險株式會社

取締役 牟田口元學 取締役 來栖壯兵衛 取締役 山田英太郎

取締役 田中唯一郎 取締役 金澤種次郎 監查役 增田義一

監查役 浮田桂造 監查役 上遠野富之助 相談役 男爵 澁澤榮一

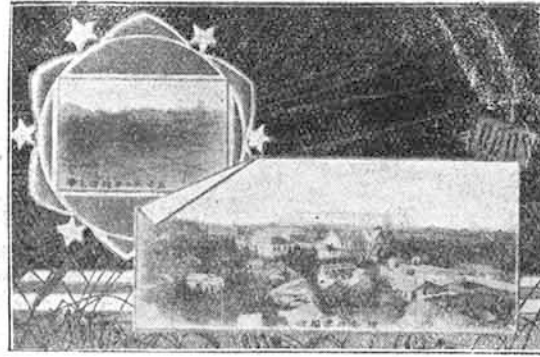
相談役 中野武營 相談役 相馬永胤 相談役 麥 少 彭

相談役 博士 高田早苗 法律顧問 博士 鳩山和夫

早稻田大學

政治經濟科
法律科
文學科

講義錄



新校 學外 年生 開幕 始集

本大學は最も校外生の指導に意を注ぎ講義の平易明快を期し質問は特別の設備をなして最も懇切に應答す又特に講習會を本校講堂に開きて無料聽講の便を與ふ

各學科共 申込次第 第一號 ヨリ取揃 へ配付ス 各學課表 及内容見 本付詳細 規則申込 次第送呈

東京牛込早稻田

振替口座 一一三三
電話番号 三七四

早稻田大學出版部



新刊

早稻田大學講師 杉山令吉編

菱湖書簡選

刷版木紙半等上
冊一全本和
錢拾八金價正
錢四金稅郵

本書
內容
雛形

寛文の書簡
感入末軽無

予は其素養を缺けるを以て文筆ともに拙劣にして殆んど讀むに堪へざるを常とす、故に高等の専門教育を卒へたる者と雖も下級の書記にすら採用し難きもの尠しとせず、是れ就職難の嘆聲常に喧囂を極むる所以なり。本書は近代の能筆菱湖翁の書簡に就き文筆ともに佳麗にして日用文の模範たるべきもの大小數編を纂め良工を選びて剞劂に附じたるもの、以て書簡文熟習の臨本となすべきなり。

書簡の社交に缺くべからざるは何人も知る所なり、然るに近時の書生は概して其素養を缺けるを以て文筆ともに拙劣にして殆んど讀むに堪へざるを常とす、故に高等の専門教育を卒へたる者と雖も下級の書記にすら採用し難きもの尠しとせず、是れ就職難の嘆聲常に喧囂を極むる所以なり。本書は近代の能筆菱湖翁の書簡に就き文筆ともに佳麗にして日用文の模範たるべきもの大小數編を纂め良工を選びて剞劂に附じたるもの、以て書簡文熟習の臨本となすべきなり。

發行所 東京牛込……………早稻田大學出版部

特に校友諸君に告ぐ

拜啓時下愈々御清穆奉賀候陳者今回早稻田大學々長より本會へ對し特に申出られ候儀有之候に付早速幹事會を開き急施を要する件を議決致たし爰に御報告を兼ね御承認と御賢慮を請ひ度候
 扱て今回母校より本會へ特に申出られ候儀と申すは

- 一 自今母校より本會の事業補助として毎年金壹千圓づゝ支出の事但し本年度は母校豫算の都合に依り金八百圓の事
- 一 早稻田大學出版部より同様の目的を以て金參百圓毎年支出の事
- 一 早稻田學報は爾後本會の事業として經營相成度事
- 一 校友俱樂部建設の舉に就き本年一月本會大會の節總長の演說せられたる趣旨に基き第二期計畫の遂行と共に母校に於て出來得る限り助勢を爲し其實行を計る可き事

右之通り高田學長より通告を受け候に付幹事會に於ては不取敢母校に深く感謝の意を表し同時に一二決議の次第を具陳候次第に御座候校友俱樂部建設の儀は御承知の通り本會の宿題として久しく解決を得ざりし所の者に有之然るに母校が將來に於て採る可き右の方針に依り漸く解決の端緒を得候次第御同慶奉存候案するに母校前途事業多端の折柄此方針を採るに至りたるは大學の擴張と共に校友團體の基礎を鞏固にするの必要を認められたるに依るべく洵に當然の事ながら畢竟母校の校友に對する温情の厚きに因るものにして誠に欣賀すべき事に有之此上は愈々益々奮勵母校に及ぶ限りの援助を與へ一日も早く其の第二期發展を完成せしむるの外無之と奉存候扱又本會へ年々補助の儀は單に事業費の内へ贈與を受けたる次第にて特に事業を指定されたる儀には無之候得共今回母校の都合に依り學報並に其附録たる校友名簿發刊の事を本會へ移されたる結果として幹事會は大會の開期を待つ能はず左の如く決定の上諸君の御承認を求め候

- 一 學報の體裁内容を全然改正し從來普通雜誌に見るを得べき論說記事の類は之を省き更に母校と本會に關する記事を細大となく網羅し主ら母校と校友學生間に氣脈を通するの機關たらしめんことを期し毎月一回發刊し之れを校友全部に配布することとし四十二年一月より實行の事
- 一 校友名簿も全會員に配布するの方針を決し先づ本年末に於て之れを實行し明年よりは追加並に訂正名簿を印刷し學報の附録として配布し數年に一回全部の名簿を刊行して配布する事

母校より贈與の補助金を可成校友全般に普及し且差當り急なる事業に投する方其趣旨に適ふものと存し即ち偶々學報を本會の事業に移されたるを機とし不取敢之か資金に充て候次第に御座候但し現在六千に餘り爾後益々増加すべき校友全部に學報並名簿を配附するには多大の印刷費と郵税を要し會員全體より定規通り維持費を納付不相成に於ては永く之を繼續する事不可能と被存候且差當り學校の補助費を此事業に投するは已を得ざれども可相成は維持費を以て之を支辨し補助金全部は往々俱樂部經營其他の事業に充て度と存じ幹事會に於ても自今維持費徵集には充分力を盡す事に決議致候次第に御座候全體本會員全部より維持費を滞納なく徴收し得べしとすれば優に一萬餘圓の巨額に上り學校名簿の印刷を始め其他臨時の事業に注ぐも尙ほ相當の餘金を剩す儀に候得ば會の事業の發展上容易ならざる儀と奉存候卒向後は維持費の滞納無之様相願度母校の特別なる申出につき御報告旁特に得貴意候頓首

明治四十一年十二月

早稻田大學校友會幹事

注意 會員の通信には總て卒業の年度及學科を肩書に記されし維持費の送金は挿入の振替貯金に付するを便とす